ふじみの



No. 26 1987

東京農大畜友会

茂原寮歌

一、黒潮の風房総の
松の梢に打ち吹かば
ああ若人の意気に燃ゆ
土の文化を進めんものと
ここに集える常磐寮

二、明日に星を仰ぎつつ
科学の鍬を手に取らば
ああ果てしなき経堂を
同胞と共に進まんもの
ここに集える常磐寮

巻頭言

学科長　渡辺誠喜

春なお浅いとき、畜友会報〝ふじみの〟の第26号の巻頭言をうめることになった。

この際、畜産学科の歴史を顧みれば、本学科は、昭和二十二年に旧専門部畜産科として千葉県茂原市高師二二四の旧海軍航空隊跡地に誕生して以来、幾多の変遷を経て、丁度四十年になる。この間、昭和二十四年に新制大学に移行し、農学部畜産学科となり、昭和三十六年四月より世田谷キャンパスへ移転し、今日に至っている。この間、学科で研鑽を積み、学窓を巣立った人は、三七四六名に達し、それぞれ国内外で活躍されている。社会的情勢も大きく変貌し、畜産業分野においても、有畜農業が提唱されてより、畜産業の専業化、インテグレーショ

ン、そしてバイオテクノロジーの開発と正しく隔世の感である。

この畜友会は昭和三十五年中葉に上級学生が茂原分校に居た関係から入学当初より卒業まで最上級生であった第十期の学生の発案により結成されたものであり、その目的は、『学生、教職員ならびに卒業生相互の親睦を計り学科の発展に寄与する』ものである。会員一同いま一度設立当初の趣旨を充分に理解され畜友会の旗印の下、一致協力して会発展の為努力してもらいたい。そして、畜友会活動が学生生活のささえとなり、これを通じて人生の礎をも築いてもらいたい。

現今の畜産人に対する社会の要請は、畜産人としての幅広い常識と先鋭化した高度の知識・技術である。恵まれた環境に溺れることなく、自ら問題点を見出し、実証的に解明する様望みたい。昨今の畜産分野におけるバイオテクノロジーは目ざましい進展である。畜産学徒の飛躍する絶好の機会である。特別会員を含めた全会員一同一致協力して畜産学発展のため推進しよう。

ふじみの

第26号

目次

巻頭言

ふじみの発行にあたり　学科長　渡邊　誠喜　1

畜産学科在勤三十七年を振り返って　教授　鬼原新之丞　6

御一報

「すべてがデラックスの国」　教授　一戸　健司　7

感新ナリ、唐詩選　教授　東　量三　12

ウサギの奇妙な習性　教授　石島　芳郎　15

鬼原新之丞先生の御退官によせて　幹事　山野　裕　16

特集

ふじみののルーツをもとめて　特集編集委員　17

別海だより

牛の香と焼酎と霧　畜産学科2年　山下　俊也　28

別海町酪農実習　畜産学科2年　勝畑　智子　29

集う学友

農大に入学して早一年　畜産学科1年　木下　雅仁　31

「夢」　栄養学科3年　山口　由実　32

「畜友会って何だっけ？」　農友会総務部副委員長　斎藤　義二　33

美味んぼ　ボン　ボン　34
ああ愛しのボンボン焼き
「ONE　STEP」　畜産学科4年　古橋　一人　35

研究室だより

家畜育種学研究室　36
畜産物（肉）利用学研究室　37
畜産経営学研究室　40
家畜繁殖学研究室　42
乳利用学研究室　46
家畜飼養学研究室　47
家畜衛生学研究室　49
家畜生理学研究室　51

収穫祭だより

収穫祭宣伝隊・副隊長を終えて　畜産学科1年　近藤　満之　54
前夜祭・特別企画　畜産学科2年　深津　弘行　55
第94回収穫祭・体育祭をおえて　畜産学科2年　塚本　渉　57
家畜苑　畜産学科3年　成瀬　薫　59
選択ミスの会計　畜産学科3年　村田登巳江　62
家畜苑　畜産学科3年　田代　義尚　63
北門委員長を終えて　畜産学科3年　花田　伸一　65
第94回収穫祭畜産学科統一本部決算報告書　68
学内スポーツ大会　69

畜友会だより

昭和62年度定期総会報告　70
昭和62年度畜友会役員選挙報告　70
選挙管理委員会活動を終えて　71
昭和61年度畜友会決算報告　72
昭和61年度畜友会事業報告　73
昭和62年度畜友会行事予定　74
畜友会規約　75
編集後記　80

ふじみの発行にあたり
（三年間を振り返り）

昭和六十一年度畜友会委員長
畜産学科三年　西川　二朗

この、ふじみの発行を最後に、畜友会役員を、退く事になり、満足感が、僕の心を満たしています。

一年の四月から、畜友会の役員となり、渉外、副委員長、そして三年の時に、なぜか、頭をやる事になり、大変だなぁーと思ってるのも、つかの間、もう、終わりになってしまった。

先輩に、怒鳴られ、また励まされ、時には、先輩の胸で、悔し涙を流した事もあった。でも、怒鳴られた事も、悔し涙を流した事も、今では、素晴らしい思い出。

そして、畜友会の活動と同時に、強烈に、心に残っている、収穫祭。一ヶ月にも及ぶ、準備期間、舞台で歌う事に快感を覚え、三年連続出場したのど自慢、そして、Mr農大コンテスト入賞、体育祭のV2?。

しかし、なぜか、自分には、いつも涙がついて回っていた。二年の時の体育祭での悔し涙、94回収穫祭で、後輩に胴上げされ、満足感いっぱいの涙、あげればきりがない。

この思い出は、特に、先輩、同輩、後輩達によって、生まれたものだと思う。自分の一番好きな言葉に、「信は力なり」という言葉がある。

一年、二年の時は、先輩を信じ、三年の時には、同輩、後輩を信じ、活動してきた。たまには、怒鳴った事もあるけれど。……

今周わりの人間を、ここまで信じて、やって来た事が無でなかった事を確信した。素晴らしい思い出、また、満足感が得られたのだから。後輩の皆も、人を信じ、また自分自身を信じ、今後頑張って欲しいと思います。必ず素晴らしい活動が、思い出が出来ると思います。頑張って下さい。

最後になりましたが、三年間、畜友会活動に於いて、お世話になった、先生方、諸先輩方、誠にありがとうございました。今後共、畜友会を、宜しくお願い致します。



御一報

畜産学科在勤三十七年を振り返って

教授　鬼原新之丞

昭和二十四年、千葉県茂原市の千葉農学部に畜産学科が出来、故木村和誠先生が主任教授でおられ二十四年五月より畜産物利用学を担当することになった。当時、茂原畜産農場は、構内にあって午前は講義、午後は実習という恵まれた状況にあり、学生諸君も常時動物に接することが出来、実学を標榜する農大に技術教育を主とするには、正に理想的環境にあった。また故千葉三郎先生が学長となられ学生教育、特に青年の人格育成に当っては、教職員と学生とのコミュニケーションを計ることを強調され構内に職員住宅を建設され、職員と学生とのコミュニケーションは誠に密となっていた。私は、木村先生の指示を受け研究室、実習室の設備作業をした。当時はまだ、食品分析、加工実習用器具機械の製造が回復していなかったので設備するのに苦労した。古のバター製造器具を購入し、当時の学科長平林先生にお願いして、農場生産の牛乳よりバターを作り、これを本校教職員に消費して頂くこととして専攻学生諸君と行い非常な好評を得た。このような経験的知識を得て後、専門書を読むと実にはっきりと認識できる。茂原時代の学生諸君は皆元気良く、勉強もしたが、また武勇伝も多かった。

小さな町なので、農大の存在は大きくクローズアップし学生の行動は良かれ悪しかれ電波の如く町の隅々まで伝わった。町で不良青年とやりあい遂には、不良青年が構内の学生寮にまでおしかけて来たこともあった。隣接した茂原農業高校の先生が本学学生の学生証を持って来られた。これが農高の西瓜畑に落ちていたとのこと、先生は、試験用西瓜畑に研究成果を見に入った時、落としたのでしょうと言って帰られた。何はともあれ無断で入ったのは、申し訳ないと頭を下げるばかりであった。とにかく、想い出となって残っているのは、悲しい、苦しいことが多いが、また楽しい想い出もあった。茂原でも本校に勝るとも劣らない、盛大な収穫祭があり、全教職員が参加し、学生と一体となり楽しんだ。学生諸君は乏しい教育設備の不平も言わず良く勉強した。

昭和三十六年、世田谷に移ってからは、大都会での生活に入って環境が一変した。学生数も多くなり、教職員と学生のコミュニケーションが少なくなり、四十年初期の学生運動の激しい頃、筆者が講義に行った所激しくつめより講義も話し合いも出来ない苦労も味わった。若い学生諸君には、我々も若くなって諸君の中にとび込まなければならないことを、痛感した。創設した研究室での研究方向の選択は、正に自由そのものとは言うもののそれだけに迷う事が多いものである。当時、日本の大学にある多くの畜産製造学は、乳学や肉学の如く、specializeするのが、慣例であった。即ち、生産から加工に至るまで凡てをカバーしなければ製造学と言えないと考え、この名称とした。そして、筆者は、食肉及びその加工方向で進むこととした。この内、特に家禽肉について追及し、これが学位論文となった。要するに研究は実証を必要とする。実証のないところに科学は存在しない。しかしやって見ると実証の困難な部分が多々あり思考している内に人生は短い、戸口に立ったと思う時既に出口での挨拶が待っていた。筆者が、担当した講義の最終時に各級毎の学生諸君より清純な花束が送られ、研究室は花一杯で飾られた。学生諸君の善意に感謝する次第である。筆者の最大の喜びは、沢山の優秀な学生諸君が農大建学の精神とオースの和の精神でおおらかでコセコセしない、人のいたみや心のわかる農大魂を発揮し、社会で重要な働きをしてくれていることである。畜産学科教職員の皆様、

学生諸君の今後の御活躍とご健勝を祈念いたします。

「すべてがデラックスの国」

教授　一戸健司

私は今迄、ヨーロッパを初め東南アジアの国々には、何回か足を運んだ。然しながら新大陸、特にアメリカの場合には、古いものに対する郷愁が人一倍強い性格だけに、食わず嫌いも手伝って自然と足が遠のいていた。

こんな折、私とは一九八一年から親交があり、愚息とも旧知の中で目下日本に留学中のフィリピンの青年Nから、「クリスマスにシヤトルに在住する叔母のもとに行くから一緒に行かないか」と誘いを受けた。幸い愚息も上司から休暇がもらえるとの事で二度目の渡米に踏み切り、一方学生のT君の同行も決定し総勢三名となった。そこで予てより一度来い来いと誘いを受けていた、サンフランシスコ在住のPオバチャンともコンタクトをとり重い腰を持ち上げた。

米国の西海岸にあるサンディエゴ市には、世界一を誇る大規模な動物園があり、ここで放飼育成されている赤色之鶏についてはCollasらがその生態等について多くの研究報告をなしているので、先づここの訪問を第一に挙げた。次いでサンディエゴ迄行ったからには、僅か一時

間で行かれるメキシコ領の国境の町テイワナ迄足を延したい。シヤトルに行ったからには、往復数時間で行かれるカナダのバンクーバー迄足を延したい。更に時間があったら、かの有名なグランドキャニオンにも行ってみたい。そして最後にかの名曲「思い出のサンフランシスコ」で御馴じみのケーブルカーに乗ってみたい。と僅かな日ではあるがずいぶんと欲ばった計画を立てた。以下、思いつくままに印象に残ったいくつかを述べてみたい。

「オー・マイ・ゴット」

サンフランシスコの空港でPオバチャンの出迎えを受け、先づレストランに入って昼食をした。そして連中が実によく食べるのにただただ驚いた。日本人としても小食である私や愚息は、彼等から見ると何か身体に異常があるとしかうつらないらしい。年配の私は兎も角として若い愚息の場合には「風邪で熱があるからだ（事実出発前に発熱してはいたが）」と弁解しなければならない様な始末。又噂にはきいていたが、何処のレストランに行っても禁煙席が大部分を占め、喫煙者は極く限られた隅の方で細々と食べているのが印象的であった。一件上流社会の出と思われる婦人が、確かに一斤はあると思われるパンと山の様な肉とサラダを平気で平らげている光景にはただただ驚異以外の何者でもなく、これらの人達とつくづく感じ入った様な次第。

「スーパー・デラックス」

サンディエゴは実に温暖で素晴らしい街であった。そして多摩動物公園を更に更にデラックスにした様な印象を受けたサンディエゴの動物園。中には山あり谷あり、この間をエスカレーターが走り、二階建のバスが園内を巡回しているが、これなくしてはとても短時間での全容の把握等は不可能であると思われる様な偉大さであった。野鶏は実に多数の個体が目撃された。そして種々のステージの雛が観察された事から、その繁殖が殆ど周年にわたって行われている様であり、むしろ岐阜地鶏に近い様に思われた。ただあれだけ多数の観光客の出入りがある以上、その防疫対象はどの様にしているのであろうか。差し当たり日本であったら伝染病蔓延の事態を招きはしないだろうか。その他野



野鶏をバックに（サンディエゴ動物園にて）

牛、プルツェワルスキー野生馬をはじめ多種にわたる家畜の原種が保存されて居り、多くの学者がこれらの野生動物を対象として研究を遂行して来た。過去の経過が納得された。

シーワールドには時間の関係で足を運べなかったが、見学するチャンスに恵まれた愚息は、その雄大さとシャチと人間の息のあったショーにはただただ感心したと述べていた。

「サウス・オブ・ザ・ボーダー」

メキシコ領国境の街テイワーナは、確かにアメリカとは全く違った雰囲気をかもし出していた。フィリピンの地方都市を連想させる軒を連ねた商店では皮製品、特産のオパールや銀製品が店頭に飾られ、店の主人が率先して「いらっしゃいませ。ただ見るだけね。安いよ。安いよ。」ときまり文句の日本語を



メキシコ領国境の町テイワナ

巧みに操っていた。T君がガイドブックで見付けた、日本語が通じる信頼出来る店「オパールセンター」では日本人の支配人に出会い、この様な異郷の地に迄進出して生活をかけている、日本人の逞しさをまのあたりに見る事が出来た。

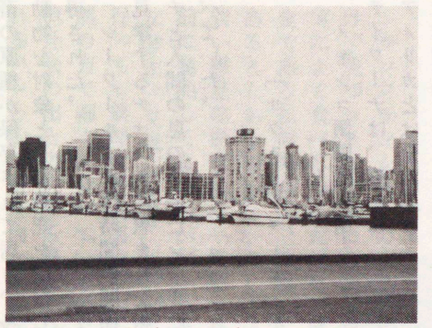
「フィリピノ・イン・シヤトル」

シヤトルでは、アメリカに移住して来たフィリピン人の家庭で、牧師を招いて実施されたクリスマスのミサに出席し、日本では味わう事の出来ない敬虔な祈りの一時を彼等とともに味わう事が出来た。ボーイングの本社のあるこの町は静かで美しく、そこで接したフィリピンの人達は彼等の母国で見る姿とはかなり違った印象を受けた。彼等の渡米は、前大統領マルコスの統括下で遂行されたケースが多く、又一部には先に移住している縁故者を頼って、その若い近親者が後から合流したケースもある様であった。

「ディ・ツァー・イン・キャナダ」

朝未だ暗き六時に出発し、シヤトルからキャナダへのドライブ旅行は実に素晴らしいものであった。この企画は愚息の発案によるものであるが私は実に貴重な体験が出来たと感謝している。見渡す限りの森林、その中を走

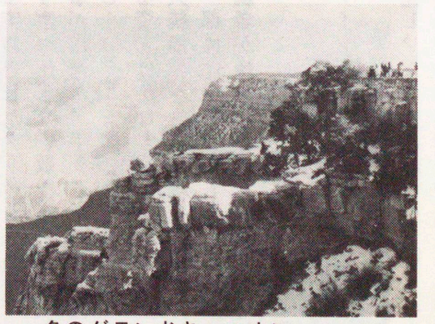
るハイウェイ。その道路沿いに「For Sale」の立看板が立っているのも印象的であった。アメリカとカナダの国境で、私達日本人三人とシヤトル在住のT嬢は、いとも簡単に「O－K－」が出たが、フィリピンの留学生Nは三十分位すったもんだし、一時は彼一人を国境に残して四人だけでのカナダ入りも考えた様な次第だが、やっとの事で全員の入国が許可されほっとした。国状によってこうも取扱いが違うものかと驚いている。バンクーバーはまさに北欧の町、フィンランドのヘルシンキと迄は言えないにしても、ゆえにデンマークやオランダ北部の都市を連想させる。澄んだ空気に美しく映える海に、薄暗くなりかかった海辺の歩道を防寒服をつけてジョッギングしている人達、当地で行われた万博の名残であるプラネタリウムのドームがくっきりと浮び出し、幻想の世界へと私達を導入する。こんな美しい世界に住む人達への憧憬と、厳しい寒さに直面する恐怖とを同時に痛感した。



うるわしのバンクーバー

「グランド・キャニオン」

やっとの思いでスケジュールに入れたグランドキャニオン。一足先に帰国する愚息とはシヤトルで別れ、T君と先ずラスベガスで一泊、翌朝六時の出発。ところがそのラスベガスたるや、新宿歌舞伎町のネオンを広大な砂漠の中に移行したと言ったらよいだろうか。ただ何分にも土地が広大でビルも高層であるため、新宿の様にゴミゴミした感はなく、何んとも異様な光景であった。ホテル内には多数のルーレット台があり、スロットマシーンに至っては処狭しと設置され、まさに町ぐるみギャンブルづくしと言ったところ。七時にセスナ機に乗ってラスベガスの空港からグランドキャニオンに向う。映画等では度々見た光景ではあるが十人乗りの小型機に揺られながら、この広大な深い峡谷の上を旅していると、危険等と言う概念を忘れただ呆然とした心境となる。そしてラスベガスの街並を砂漠の中に見た時、やっと現実に戻りこれこそ自然の驚異ではなかろうかと述懐した様な次第である。



冬のグランドキャニオン

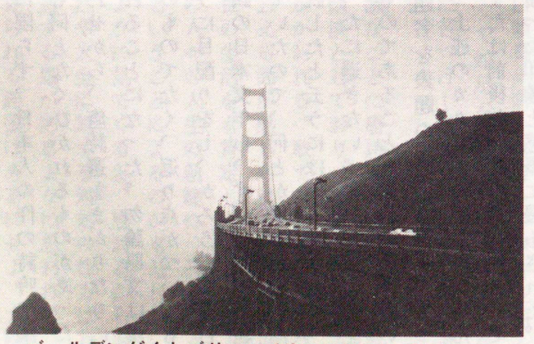
「アイ・レフト・マイ・ハート・イン・サンフランシスコ」

再びサンフランシスコに戻る。この町は海から立昇る朝方の霧と、小さなケーブルカーで上下する坂のある街並での観光で有名である。このケーブルカーに揺られながら、マスターの称号を持つ世界銀行勤務のPオバチャンはこんな事を述懐した。自分は現在マニラ市のマカティ（最近新聞紙上に度々出て来るフィリピンにおける商業の中心地）に三階建のマンションを建築中である。これは老後はそこに家族一同が住みたいからだ。アメリカは現在活動出来る人達にとっては実によい国であるが、生活力がなくなった老後はとても住みづらいと。



ケーブルカーを待つ人々（サンフランシスコ）

私は彼女のこの一言で、正面からのみでなく、裏からもアメリカの一部を垣間見た様な気がする。そして私の様に小柄で初老に達した人間にとっては、やはりこの様にどえらく大きく、且活動的な国よりは、むしろもっとこぶりで一つ一つが確立されている国の方が心が休まるのではないか、とふっと思う様になった。その一方サンディエゴには是非とも再度行かねばならぬと誓い、この旅を終えた。



ゴールデンゲイトブリッジ（サンフランシスコ）

感新ナリ、唐詩選

家畜衛生学研究室
教授　東　　量　三

唐は西暦六一八年に起こり、同九〇七年に滅びた中国の王朝である。この約三百年に近い期間は、我国の推古天皇の飛鳥時代から聖武天皇の天平の御代を中心とする奈良時代を含み、さらに平安時代のはじめの百年迄のかなりの期間に当っている。この時代は我国から遣唐使が唐に派遣され、最澄、空海なども唐に学び、文物の我国に輸入されたものが多く、我国の文化に大きな影響を及ぼしたことは既に御承知のことと思う。

唐詩選は唐代詩人の詩選集であり、明の時代、西暦一五二二年に出版されたとある。選者については李攀竜と云うが、疑わしいともある。我国には江戸時代に渡来し、漢詩の入門書として大いに読まれたようである。

私は中学時代漢文を学んだが、その時の教科書に十八史略があったのは覚えているが、唐詩選は教えられたかどうか定かではない。ただ何かの機会に李白の「千里ノ江陵一日ニ還ル」とか、「春眠暁ヲ覚エズ」というような片言隻句は覚えてしまい、若干親近さを感じていた。これらに限らず、日本人の作の詩吟で謳われる漢文調のものにも何となくひかれるものがあった。最近不思議な巡り合わせから、唐詩選をまがりなりにも一読する好機に恵まれることになった。勿論原文は漢籍であるから読める筈のものでなく、返り点がついたものを昔習った漢文のように目配りをし、かろうじて読むことが出来、且つ明治調の日本文乍ら、すべて一二七題の詩に解説がつけられていたので、何とか理解ができた。と云ってもやはり一読したと云うにはおこがましく、字面を追って眺めていったに過ぎない。従ってここに記す一文もかなり浅薄なものであることを御承知おき願いたい。

扨て題名を表題のように気取ってつけさせて戴いたが、先づ上述のカタコトのように口吟んだ言葉が新に詩全体、または前後句の間の、一節としてとらえられたので、改まった印象と感慨に浸らされた。また例えば上述の「千里ノ江陵」は「早ニ白帝城ヲ発ス」と題する李白の詩であり、「朝ニ辞ス白帝彩雲ノ間、千里ノ江陵一日ニ還ヘル、両岸ノ猿聲啼イテ住ラズ、軽舟已ニ過グ萬重ノ山、」の七言絶句で起承転結していること、また「春眠暁ヲ覚エズ」は孟浩然作の春暁と題する五言絶句で「春眠暁ヲ覚エズ、處處蹄鳥ヲ聞ク、夜来ノ風雨ノ聲、落ツルコト知リヌ多少ゾ、」と結ばれていること、五言

古詩という言い回しの句に魏徴の述懐があり、ほぼ十五行に及ぶ長文の最終の句の中に「人生意気ニ感ズ、功名誰カ復論ゼン、」とあり、これは天子の云はば思召に感じて詠んだ詩の一節であることなども学んだ。

唐詩選は上述の五言絶句、七言絶句、五言古詩など七つのカテゴリーに分けられているが、どれがどのように分けられるのか、音韻、音律の妥当性などについては筆者の手の及ぶ処でなかった。しかしいわば詩の質的性格として気宇壮大、直情、格調、簡潔、荘重、抒情性などが感じられた。反面、繊細、軽妙、洒脱を感じさせる面もあった。また少し俗に云えば節回し、口調、トーンの良さ、或いは余韻嫋々と云った趣を感じ、特に強調すべきは、精神の昂揚を覚え、心中に快哉を叫ばせる男の詩であるという点で、共感を覚えずにはおかなかった。

詩の主題〈モチーフ〉の一つは自然を主とし、春夏秋冬の四季、月、雲、風、雨、雪、山、川、湖、草、木、花、鳥、獣などに及び、他は人生を主とし、諸種の人生体験、人生行路、日常、望郷・都落ちの念、旅情、懐古、戦場・戦禍の憶い、離・送別、酒宴、酒徒の交わり、畏敬、友愛、恋情などが詠まれている。自然と人生が綾をなして謳われているのも多く、自然の悠久と年々歳々の四季の移り変りを人生の哀歓と共に謳い込んでいる。

学びの場にいる者を唐代の人は如何にとらえたであろうか？残念乍ら「少年老イ易ク…」のようなズバリの詩は唐詩選に見当らない。しかし「紅顔と白髪」は何人かが詠んでいる。その一文の一部のみを紹介する。「白頭ヲ悲シム翁ニ代ル」と題する劉延芝の詩である。詩の終りが「毎年歳歳花相ヒ似タリ、歳歳年年人同ジカラズ、言ヲ寄ス全盛ノ紅顔子、憐レム應シ半死ノ白頭翁、此ノ翁ノ白頭真ニ憐レム可シ、伊昔紅顔ノ美少年、」である。ここで蛇足を加えるが、文中、言ヲ寄スというのは、人に言づけして若い者に云い聞かせておくという意味である。

不思議なことに唐詩選の詩には、運命的なその人生に意外に恬淡としており、清貧に甘んじようとする、潔癖性もうかがわれる。敢て身分不相応に行動しようとしないとも云える面が感じられる。従って世を捨て隠者となり、遁世の生活をも肯定しているかのようである。これは当時の人々の人生の軌範に、孔孟などの教えが浸透していたということによるのかもしれない。

このように見てくると、唐詩選から察せられる唐代の人の自然や人生に対する対処の仕方は我々日本人のそれと一脈通ずる処があるように思われる。ただ「白髪三千丈」に見られる誇張はあるにせよ、大陸の人の悠然たる気質を、日本人が持ち合わせているかどうかである。し

かし識者が唱え、万葉人の詩でうかがわれるように、往時の日本人にはおおらかさがあり、天真爛漫な性格をもっていたに違いない。実際最初に述べたように、唐詩選の中の一部の詩人の生きた時代と我が万葉人のそれは、奇しくも同時代である。

唐詩選の中で極めて注目すべき一つの詩がある。王維が阿部仲麿（唐で晁監と呼ばれ玄宗の秘書であった）が唐から我国への帰るに際して、感懐を込めた詩である。国名日本がでてくる意味でも一つの感動をもたらすものである。詩を紹介し、服部南郭という人の名訳に愚筆を加えて、雑文を終わらせていただく。

「秘書晁監日本ニ還ヘルヲ送ル　王維

積水極ム可カラズ、安ゾ
知ラン滄海ノ東、
九州何レノ處カ遠キ、萬里空ニ乗
ズルガ若シ、
國ニ向ヒテ惟日ヲ看、帰帆
但、風ニ偕ス、
鰲身天ニ映ジテ黒ク、魚眼
波ヲ射テ紅ナリ、
郷國扶桑ノ外、主人孤島ノ中、
別離方ニ異域、音信
若為通ゼン、

訳

海（積水）はどこ迄も続いて果てもなく、広い海（滄海）の東になにがあるということも知れぬ。

古へに天地の間に唐のような國が九つあると云われているが、あなたの帰られる日本も九つの國（九州）の内であろうが、どれ程遠いやらしれぬ故、ただ空を雲に乗って行くようにして行かれよう。

聞けば朝日の出るのを目あてにして行くと云うが、帰ると行っても急ぐこともならず、とどまることもならず風次第で、風を頼みに行くというものである。

海の中に鰲魚などの舟を呑みそうな大魚が時々浮かんで、空に映って真黒に見え、魚眼の光が波を射て紅に見える。そのような処を通って行かれると云うことはなんと難儀なことであろう。

あなたの國は日の出るに近いと云うことで、扶桑の木の近所であろう。あなたの主人は孤島の中での天子であるから、あなたが中国から帰って大きなことばかり見た目ではさぞ窮屈な思いをするであろう。

互に異国にわかれて住むことだから、音信を通ずると云うこともなるまいと思うと、名残惜しいことである。

（畜友会編集委員の校正の勞を謝す。——筆者）

ウサギの奇妙な習性

教授　石島芳郎

ウサギの仲間は、自己の排泄物である糞を再食するという奇妙な習性を持っている。といっても、再食する糞は、通常の固くて丸い糞ではなく粘膜に包まれた軟らかい糞で、夜間これを排泄するとウサギは、直接肛門に口を近づけ飲みこむのである。この現象は、飼いウサギばかりでなく、飼いウサギの原種であるアナウサギにもノウサギにもみられ、科の違うナキウサギにもみられる。

アナウサギの食糞についてはR・M・ロックレイ（立川賢一郎訳）の『アナウサギの生活』に擬反芻と題して紹介されている。

ところで、ウサギの類の食糞現象はいつの頃から知られていたのであろうか。もと東京農業大学の学長　平林忠博士によれば、一九三九年にネイチャー誌に掲載された『ウサギは反芻するか』という論文で紹介されるまでは、ほとんど世界の人々には知られていなかったというくだんのロックレイの著書にも食糞現象の最発見……といった書き方で、一般に知られるようになったのが比較的新しいことを示唆している。

しかし、その発見はかなり古いことのようである。

というのは、『旧訳聖書』のレビ記第十一章に「……兎、是は反芻ども蹄分れざれば、汝等に汚れたるものなり」、又、申命記第十四章に「……但、反芻者と蹄の分たる物の中、汝等の食ふべからざる物は、是なり、即、駱駝、兎および小鼠此等は反芻ども蹄分れざれば、汝等には汚れたる物なり」と、それを暗示する文がみられる。つまり、当時の人は、ウサギ（ノウサギを指す）が食物の二度食いという形の反芻行為を知っていたと解釈すべきであろう。

『聖書に見る動物の世界』を書かれた橋本重郎氏によれば、「ウサギは始終、口をもぐもぐ動かしている習性なので、それを何かものをかんでいるように思い、昔の人は、反芻するものと、見あやまったのであろう」と別の解釈をしている。この辺の真偽は、実際には定ではないが、もし氏がウサギの食糞習性を知っておられたら、こういう解釈には、ならなかったのではないかと思われる。

ともあれ、飼いウサギに、食糞ができないよう首かせをしておくと、約1ヶ月で死亡してしまうほど食糞は、その重要性は、再食される糞に多量のビタミンB_{12}や各種のマミー酸が含まれていることを挙げている。兎にも角にも、奇妙にうつる食糞も、ウサギの仲間にとっては死活にかかわる重要な消化活動なのである。

鬼原新之丞先生の御退官によせて

畜産物（肉）利用学研究室
幹事　山野　裕

今年は、暖冬ということで例年より冬が短く、春がもうそこまでやってきています。

春は転機の季節。多くの事柄において、新しい一年が始まる時期であります。

そして、我々畜産学科においても、今年の春、一つの変化があります。長い間我々を御指導して下さいました鬼原新之丞先生が、この春をもちまして我が校を退官されることとなりました。

新四年生には「畜産物利用学」の後期分を御担当され食肉・卵について教授して頂いたのが記憶に新しいことだと思います。さて、鬼原先生は、畜産物（肉）利用学研究室、通称「肉研」の室長を長い間努められ、松岡先生と共に当研究室を温められてきました。納会等におきましては農大並びに畜産学科の歴史を語られ、我が校の長い伝統を知ることができました。また、この長い歴史の間に食品業界を中心に、多くの先輩を送り出し、御活躍なさいました。

今後、我々は畜産物利用学研究室として再出発しますが、今まで以上に飛躍していきたいと思います。我々が社会に出てからも、何かの機会で先生の御世話になる際には、宜しく御指導の程、お願い致します。

これからも御身体には十分気をつけて御活躍下さい。



特集

ふじみのの

ルーツをもとめて

茂原時代の学生生活

戦争の傷がまだいえぬ昭和二十二年三月、千葉県茂原市に、現在の畜産学科の前身である専門部畜産科が設立され、以来四十年の年月が流れた。

その間キャンパスは世田谷にうつり、学生数も急増した。「農学ブーム」「バイオブーム」といわれ、社会も生活も変化してきている。これからの畜産を担う我々にとって「バイオ」や「先端技術」は重要な役目をするにちがいない。しかし我々はそれらの言葉にのみとらわれてはいないだろうか。畜産学科設立四十周年を迎え、新人類といわれている我々が、茂原時代の学生生活をどう見てどう思うのか。その中から何か大事なことが見つけられるかもしれない。

はじめに

最近、「バイオテクノロジー」や「農学ブーム」と言われ、我農大でも志望者が急増してきている。おそらく読者の中にも「バイオブーム」にのって畜産に入学した人もいるだろう。この特集は、戦後直後から昭和三十六年まで、千葉県茂原市にあった農大畜産学科について、当時の学生生活を知ることで今の自分達について考えてみようというものである。しかし私たちは幼い頃から、大人達の昔話につき合ってきた。「今の若いもんは…」のあとには必ずといっていいほど昔の事が話題になり、私たちは説教されてしまうことになる。この特集では決してそんな説教をするつもりはない。ただ戦争により荒廃した畜産を背景に、畜産を学んでいた事では今と同じである先輩達がどんな学生生活を送っていたのか、何を考えていたのか、を取材してみようというものである。この会誌名〝ふじみの〟は茂原市のふじみの地に畜産学科があったことよりつけられた。二十一世紀の畜産を担う我々にとって今ここでもう一度〝ふじみの〟をふりかえってみよう。今年、四十年をむかえる畜産学科の学生として、学科の歴史さを知っていただくだけでも結構である。とにかくむずかしい事はぬきにして、読んだあと何かを感じていただければ幸いである。

特集編集委員一同

一、当時の社会・畜産について

まず、昔の学生生活を知る上で必要なこととしてその当時の社会についてと学生達の文化について簡単に調べてみることにした。

農大茂原時代は、昭和二十一年からはじまった。昭和二十一年は、日本列島を飢え・インフレ・敗戦の苦しみを伝える暗いニュースが流れていた。食料は配給で一日二合一勺（約三百グラム）という米の配給すら維持できなくなっていた。国民は飢餓線上にいたのである。そんな中、茂原市高師の地で昭和二十一年六月十一日、学生五十名参加により開校式が行われたのである。当時農大について、昭和三十二年農大図書館長であった大野史郎先生による「農大千葉分校誘致の記録」より抜粋してみる。

「当時の貧困なる農大の財務事情の中では、赴任した職員の給与すら遅延して居った程なので折角獲得した施設に対しても何等営繕の手が加えられず放任のままで荒廃は甚だしく同年末の頃に及んでの旧地主や地元民の批判は漸く厳しいものが起こってきたのである。然し乍ら先に大蔵省千葉財務局の管理容認に伴い入学を許した。十七名の実習生は外部に対しては農大先達としての体面を保ち、内にあっては敷地建物の管理に迄、献身的な努力を為し千葉分校建設に当り特筆すべき働きをしたもの

であった。」

その後、昭和二十二年専門部畜産科が林学科と共に設立された。当時は戦後直後とあって苦しいスタートだった。その頃の社会では「鐘のなる丘」というラジオドラマが流行した。明るい話題に飢えていた人々にとってこのドラマは評判がよかった。食うのにせいいっぱいの時代の中、人々の娯楽は主にラジオだった。そしてその後人々の心を明るくさせたニュースに「フジヤマのトビ魚」水泳古橋の登場がある。昭和二十四年全日本選手権で世界新をだした古橋は当時の新聞のトップをかざった。そしてダンスパーティ大流行。喫茶店の登場。サンドイッチマンが街にあらわれ話題になる。昭和二十五年から三十年ごろになると商品の生産力も戦前なみに回復する。それにより今まで配給ずくめであった生活も次々と配給統制のわくがはずされた。人々の所得も昭和二十六年には農家が二十七年には個人事業主が、一般サラリーマンが戦前の水準に追いついたのは昭和二十九年であった。テレビ・電化時代が幕をあけたのもこの頃であった。力道山が人々をわかせたのもこの時代である。

昭和三十一年の経済白書は「もはや戦後ではない。」ともうたいあげた。この頃から都市への人口集中、通勤労働者の増加、消費生活の向上とさまざまな変化があった。それは世相や風俗をも大きく変容させた。自由に快楽をもとめる若者たち（太陽族・カミナリ族）が現われたり、グラビアから抜け出たようなファッションもこの頃である。現在、我々もファッションには男女を問わず興味がある。DCブランドといわれるものが流行し、ワンレングスの髪型が典型的な女子大生の形ともいわれている。昭和三十五年半ばごろから大流行したミニスカートについて編集委員の好みにより一つの例として考察をしたので当時の若者ファッションについて考えてみるのもおもしろいと思う。高度成長期を迎え、ようやく若者にも娯楽を楽しむ余裕がでてきた。昭和三十五年頃の卒業アルバムを図書館で見ることができた。学生はほとんどは黒ブチメガネで、あまりロカビリーしていたとは思えない。渡辺誠喜先生にも当時の学生について服装の面でお聞きしてみたがやはりシンプルなものだったそうだ。学生時代は勉強もしまた遊ぶ時でもある。昔の学生はこの遊ぶという面をどう考えていたのだろうか。アルバムを見ているうちに思ってしまった。昔も今も遊びたい気持はかわっていないはずだ。

敗戦というショックから日本はたちなおり、高度成長期を迎える。今回、取材の対象となる茂原時代は、ここまでの時代にあたる。食料不足の社会を背景にはじめ高度成長期には第一次産業人口の減少がおこる。農業は大きな転換期をむかえたにちがいない。その中での畜産界の動きはどうだったのだろうか。

現在、畜産界には「バイオテクノロジー」という分野が大きな影響を与えている。新聞でもテレビでもバイオはさわがれている。今の学生の中にもこのバイオブーム

にのって入学した人もいるだろう。それでは茂原時代の学生の背景での畜産界はどうであったのか。第二次大戦後の畜産の流れについて調べてみた。

戦前における畜産はおよそ「産業的」というものではなかった。これは飼養の面でいえる。数匹の豚、何羽ずつかの鶏が農家の残滓物で飼育されていたし、労働力の一頭の役牛が一戸の農家にあって雑草とかで養われていた。およそこれらの畜産では飼料の栽培などという余慮はなかった。それに対し戦後は、養豚、養鶏、また乳牛が大規模多頭飼育方式で行われ、大規模な投資も行われている。飼育場は「工場的」性格をもった。これに伴い濃厚飼料の消費が増大しその海外依存度は次第に増えた。外面的にいって産業革命的色彩に富んでいることは確かである。これほど外観の変革された部門はわが農業界にはないし、またこれを実現していった農民の企業的精神は戦前のわが農村では想像もつかない。高度成長期による国民所得の増大、食生活の変化は畜産界に大きな影響を与えたことは当然である。大戦による米不足に基づく粉食の普及があって、これは必然的に畜産食品の消費を増してそれが食生活に溶け込んでいき、また戦争中からの乱獲による魚の減少と漁区制限による水揚げ高の減少は、動物性蛋白質の給源を家畜に求めさせることになった。さまざまな変化の中、畜産界も激動の時代といえよう。第五期畜産学科卒業生（昭和三十四年卒）の渡辺誠喜先生に当時の畜産界について簡単にきいてみた。



昔のミニスカート

なぜか昔のミニスカートにはワンピースが多い。流行だからということでどんなに太い方でも、着ていたように思える。今は、ストライプのニーソックスとあわせて「細くみせる」というふうに科学的に着ていますね。農大の女の子も着ていたのかな？



今のミニスカート

ちょっと若いかナァ

「学生の頃は、人工授精師というのが当時ひかっていましたよ。昭和二十五年、日本では家畜改良増殖法が制定されその後、人工授精の普及の基礎が確立されましたから。それと輸入飼料が増大し、飼料会社の増強がおこりました。畜産科の卒業生も有名な飼料会社に就職した人も随分いました。技術改革と戦後の動乱のたちなおりの中でした。畜産的な景気はわるかったですよ」

人工授精の技術は、その後の畜産に大きな影響を与えた。現在はほとんどの家畜がこの人工授精の技術を用いている。この人工授精の普及しはじめた頃が、茂原時代の後期だった。

畜産経営の企業化、人工授精技術の普及は今我々の背景にあるバイオと同じような影響を当時の学生に与えていたにちがいない。

我々取材班はこのような時代の中、どのような学生生活を先輩たちが送ったのか、実際に茂原市をおとずれて学生達と触れあっていた人達、そして当時学生であった先輩達にお話をうかがい、さらにくわしく当時の模様を聞くことにした。

"ふじみの" の由来

この会誌名 "ふじみの" とはいったいどこからの由来であろうか。第一号では当時学科長でおられた平林先生が「ふじみのの地に由来する」と述べられており、我々取材班は茂原市立図書館の協力によりふじみのの地について調べることができた。

○富士見の概要

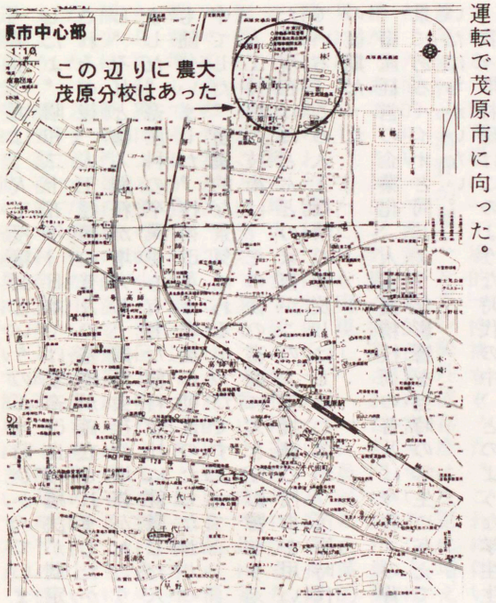
富士見地域は旧海軍飛行場の跡地であって飛行場設置前は旧来郷村町保の地積に属し小字に富士見八貫野、八幡前、東之台寺があり面積凡そ弐十丁余反にて町保最初の住民地帯であった。

茂原市東南部発達史より

これ以上の事はわからなかったが、元農大のあったところに　富士見橋　という橋があったことよりおそらくこの　富士見　から由来したと思える。富士見というのだから昔はこの地から富士山が見えたのだろうか？

「ふじみののルーツをもとめて」
――茂原の地を訪れて――

昭和六十二年、二月十八日　我々取材班はふじみののルーツをもとめて千葉県茂原市に向った。空はあいにくの小雪である。この特集の目的である茂原時代の学生生活を調べるため、当時の茂原分校の周囲の人達がどんなふうに農大生を見ていたのか？そして当時、茂原分校で学生生活を送った先輩達に話をきくのである。車は安全運転で茂原市に向った。



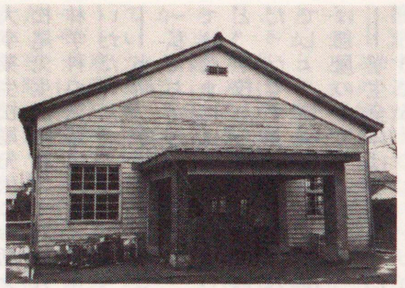
市内にはいったのは午後一時。早速、以前農大のあった場所近くのコンビニエンスストアーで聞いたこの地で古くからある〝上福屋〟という八百屋さんにはいる。

我々は全く知らずにはいったこの八百屋さん、実は現在、畜産学科の先生でいる渡辺誠喜先生や近江先生がよくお世話になっていた食堂であったことがわかった。上福屋さんのおじいさんは、当時の学生について淡々と語ってくれた。

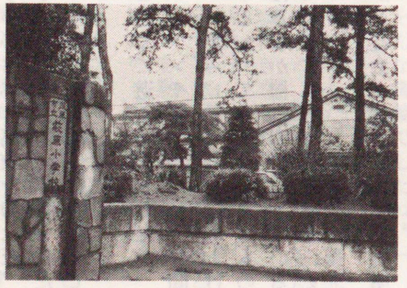
「ここは田舎だから……。都会とはちがう。都会の学生とはかわっているよ。当時、みんなツケで喰っていたよ。そうだねぇ、帳面につけたのが、三十人から四十人はいたよ。食えばみんなあくる日はなくなってしまったね。だけどあの頃は不景気だったからね。仕送りも当時で一万円送ってくれていた人は少なかったよ。みんな六千円ってくらいかな」

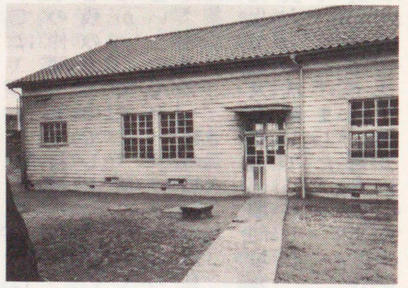


今は八百屋さんだが
当時は農大生が常連
だった食堂



萩原小学校に今も残る
茂原分校当時の校舎





上福屋さんで茂原分校の校舎がまだ残っていると聞いた我々は早速、その校舎のある茂原市立萩原小学校へ向った。そこで今は講堂となっている校舎を見ることができた。

茂原小学校の先生から紹介された山田文具店へ向う。そこで今度は新に当時農大生を下宿させていたという、大塚さん、そして農大卒業生で、現在県立茂原農業高校で教員をされている松尾先生を紹介していただいた。

まず大塚さん宅を訪れて見た。現在林学科の先生でいられる塩倉先生（当時高木さん）を下宿させていたというおばあさんの話を聞くことができた。「農大生はあばれん坊でしたか？」の問いに対し、

「そういう方も多かったですよ。お酒のんでよく酔っぱらって歩いていましたね。茂原は当時は農大生の町のようでにぎやかでしたよ。」

――当時、アルバイトはどんなものを？――

「家庭教師ぐらいでしたね。今は色々ありますけど」

――やはり収穫祭はありましたか？――

「そうですね、仮装行列なんかあって……にぎやかでしたね。」

茂原に農大があった頃はやはり学生の町としてにぎやかだったらしい。卒業後も茂原の地を訪れる卒業生が多く大塚さんも上福屋さんも喜んでいらした。

その後、現在県立茂原農業高校で教員をされている農

大卒業生松尾先生にお話をうかがうべく高校を訪れた。松尾先生は昭和二十八年入学され三十二年に卒業された林学科の先輩である。早速、当時の模様について語っていただいた。

――当時、学生はどんなことをして遊んでいましたか

「私たちが遊んだのは、マージャンや碁だったね。仲間ではたまには若いんだからって飲みに行ったりはしたけど。学校から帰ってきて何するかっていえばそんなものだったですよ。今の若い人は車とか機動力をもっているでしょ。昔はそんなのなかったですからね。遊びといえば部屋の中ですよ」

――学生全体はどうでしたか？社会が揺れ動いていた頃ですが

「終戦から二十五年位にかけては、やはり物資もないしザワザワしてましたね。大学の仲間でも予科練から帰ってきたような、まだ戦争の名残のある中でしたね。今の〝楽しい〟という楽しさはなかったですよ。飲みにいくのは焼酎で、〝安いなぁ〟というのでね。コップ一杯の焼酎に焼鳥四本ぐらいでした。コップ一杯の焼酎に焼鳥4本で随分酔えましたよ。」

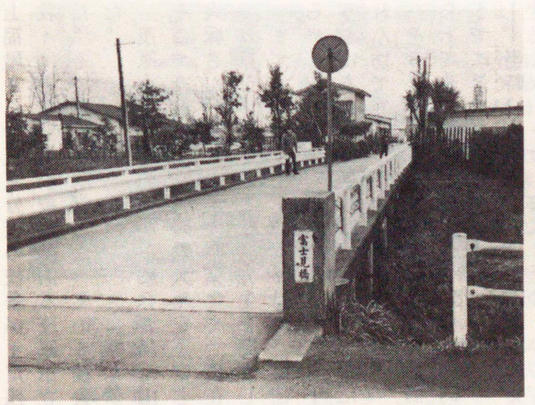
松尾先生は現在林学科の先生で農友会剣道部顧問塩倉先生と共に、茂原で剣道部員として活躍していらした。当時の部活についても語っていただけました。

「当時、道場は空手と柔道と一緒で長い鶏舎のような所でしたね。そこで合宿なんかもやって……ものすごく苦しい練習でしたね。防具なんかは学校にはなくてね、個人もちでした。」

――当時の生活費は――

「当時、一ヶ月の生活費が倹約して三千円くらいでした。中には山持ちがいて、そういう人は馬に乗って学校に来ていたりしてね。仲間では三千円くらいでしたよ。」

松尾先生はその後、同じ県立茂原農業高校で畜産科長でおられる糸井先生を紹介してくださった。



現在、県立茂原農高内にある〝富士見橋〟。ふじみの名の由来と何か関係があるのだろうか？

県立茂原農業高校畜産科糸井先生は、昭和二十五年専門部畜産科二回卒でおられ、終戦直後から茂原の地におられた。

――当時農大生はどんなふうに見られていましたか？

「地域社会はこの辺が純農村地域ということもあり戦後すぐということもあって、農業に対しても農大に対しても期待は大きかったですね。学生はみんなそれを感じていましたよ。」

――その頃の授業というのはどんなでしたか？

「我々の教わった先生方というのは東大から来た、東大で定年となったすばらしい立派な先生方がいましたね。だから講義の仕方もちがい、あまり笑いもなく、学生は筆記するだけでたいへんな、そんな講義でしたね。」

――その頃の研究室は？――

「まとまった研究室はありませんでした。ウサギの研究とか……牛もいました。私たちはね、実習に行きましたよ。私は千葉県佐倉種畜牧場に行きました。」

――どんな実習をしましたか？――

「当時は餌がなかったですから、色々な飼料の配合とか、トウモロコシだとか、ニシンを動物蛋白として使っていたから手でちぎって餌としてやっていましたね。」

――家畜の中ではどれに力を入れていましたか？――

「やっぱり牛ですね。乳牛ですね。ジャージーがいました。当時は余り動物との接触が少なかったと思います。学校内で動物に触れるという機会はあまりなかったですよ。だから各自でみんな校外実習に行きました。とにかく、施設や設備が充実していたならばもっと学習できたと思っています。不満というよりは、どこまであったらいいかわからなかったですからね。昭和二十五年以降、産業教育振興法で農高で牛を飼ったというのは覚えていますからね、大学も購入する余裕はなかったです。」

――学生はどうでしたか？――

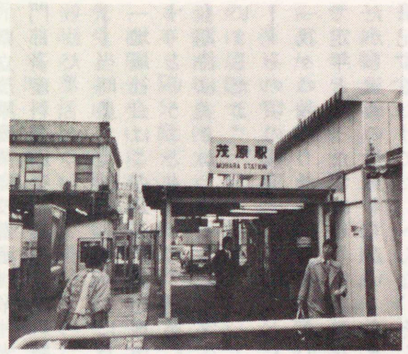
「みんな北海道や九州とか遠くから来た人が多かったですよ。みんな開拓精神に富んだ人が多かったですね。中国から来た人もいましたよ。」

――男女交際というものはどうでしたか？――

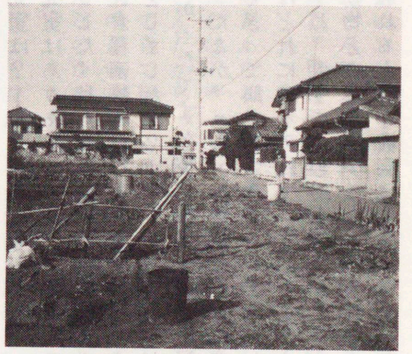
「そうですね、校内に女性はいませんでしたから、まあ事務の方にはいましたけどね。だから交流というのは、下宿屋の娘さんと、というのが随分ありましたね。」

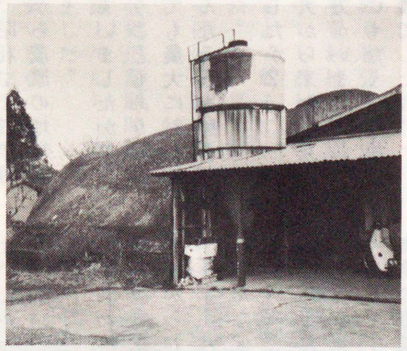
「当時は、農業高校から来た人は少なかったです。普通科の人達が多かったですよ。試験ではいりますからね。農業高校から大学へ入るのは単位数の面でたいへんな努力が必要でしたから……。授業料も高かったし、地域から行く人は一人か二人位でしたからね。」

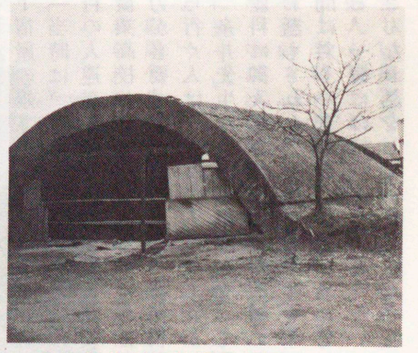
糸井先生は、家で畜産をやっていた関係もあり農大畜産科に御入学された。農耕機械の普及する以前の役牛のお話もされた。「今の大学生をみてどう思うか。」の質問に対し「若い者には若い者の考え方があり、良さがある。一概にははっきりと言えない。」と述べられたあとこんなお話をしていただいた。

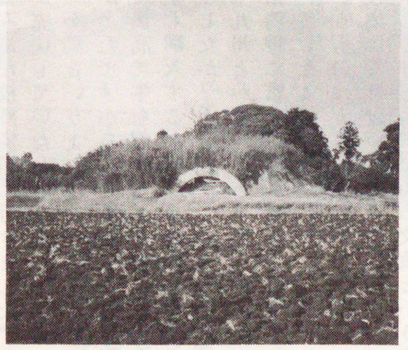


現在の茂原駅


以前，農大のあった周辺は，住宅地となっている


えんたい濠を使って酪農をされている臼井牧場


この辺りが旧陸軍飛行場であったことを思わせる“えんたい濠”飛行機を空襲から守るためにつくられた。


以前は多くあったこの濠も今や数少ない。

「動物飼いというのは、動物に接し常にみていなければいけないと思います。ある時、千葉県の佐倉にある有坂牧場で私が連れていった生徒に対し主がこんなことを言ってくれました。『私は成牛でおよそ百五十頭飼っている。その全ての牛のカルテを私は全て頭の中に入れてある。夜中、牛が鳴くとその声でその牛がどの牛であるか、どんな状態の牛であるのかすぐにわかるのだ。牛飼いをするのならこの位でなきゃいけないよ。おまえ達、その位の意気込みがなきゃ牛飼いをする資格はないよ。』とビシッといわれ立派だと思いました。そういうことのよくわかっている学生は立派だと思いますよ。実際に動物に接しその中から身につけていく。それが本当の勉強だと思います。」

動物と接したかったがその時代のために思うように勉強ができなかった、設備さえあれば……と思いながら好きな動物との触れあいを求めた学生生活を送った糸井先生のお話は、畜産の根本にせまるものであった。時代の違いは、我々の思っていた以上に先輩達の学生時代を印象づけさせられた。

当時茂原分校のあったところは一帯が住宅地になっていた。駅も改築されその周辺も大きくかわっていた。やはり、四十年という年月の流れは全てのものを変える時間である。我々取材班はそんな中のわずかに残っている農大を見つけに行った。それはキザな言い方かもしれないが人々の心の中にあった。上福屋さんのおじいさん、大塚さんのおばあさん、松尾先生、そして糸井先生と、みんな顔をほころばせ語ってくれた。今、我々はそんな歴史と伝統のある農大畜産科の歴史の中にいる。当時の先輩達が戦後の動乱の中、遊び学んだ学生生活が今の自分達にもあるのだ。改めてここで考えさせられた。

編集後記

時間と誌面の関係上、中途半端なものになってしまった気がする。時代と学生生活をもっと深く結びつけて考えてみたかった。今後も ふじみのルーツをもとめての旅を続けていく姿勢である。最後になったがこの特集によせて御協力していただいた方に対し厚く御礼申し上げます。

最後に我々の大先輩でいられる糸井先生の我々への忠告のようなことを言って頂きました。その言葉でこの特集を終わらせて頂きます。

「一緒に動物に接している機械がでてくると機械に人間が使われてしまう形になってしまう。私は決して、時代の先どりがいけないとは思っていない。思わないけど機械に使われるようになってしまうと大変なことになってしまう。まして動物飼いというものはね。そして基礎、基本というものをしっかりと身につけること。それはどんな時代が来ても、ものの解決にあたるということができるのではないか、それが勉強ではないか。と私は思うよ。」

別海だより

牛の香りと焼酎と霧

畜産二年　山下俊也

本来ならば自分は「集う学友」のコーナーで、収穫祭や畜産学科の選管のことなどを書くべきである。というのは自分は個人的に別海町の農家「佐藤定一さん方」にお願いして実習させていただき、畜産学科を通して申し込んでいないからである。

理屈はさておき自分の見たままの北海道のことを書いて見たいと思います。八月四日、私は東北新幹線や青函連絡船に乗り大地の前に着いたのである。せまりくる大地を前にして私は大顎を開いた巨大な生物に飲み込まれるような気がしていた。やがて黎明が訪れると、そこにはチモシーの穂と濃い桃色のヤナギランと、純白のマーガレット、ムシトリナデシコなどが生える西洋的な草原がどこまでも広がっていた。私は別海迄その美しい風景の中を進んでいった。当初別海町が香川県と同程度の面積であることを知らなかった私は上春別の駅まで来るとそこで簡単に下車してしまったのだった。すると目の前は牧場でホルがいたのだ。ホルについていけば一軒の農家に着いたが、その人が親切な方だったので、佐藤さんに迎えに来ていただけた。

昭和六十一年は牧草の伸びが悪く冬場の餌の準備が極めて難しい年だったと後でわかったのだが、実は無理をいって佐藤家に二人の実習生「同級の岩下と」を採用してもらったのである。佐藤家には親切な奥さんと可愛い女の子と男の子が二人づついました。

最初に実習に来た岩下君は女の子にモテモテだったようで、自分は六才のつよし君と二才のひろし君と仲良しになれて楽しかった。

五時になると霧の中に二人で飛び込んでいき彼はミルカーの準備、自分は若牛房の中の除糞をするパターン。体当りで襲いかかる若牛をけとばしながらの作業に汗。

搾乳の時になると乾乳以外の牛を一頭づつ乳をふいていくが、最初は失敗することが多かった。次に餌やりであるが、ビートの葉がサイレージになるのを初めて知った。ビートといえばさとう大根のことであるが、佐藤家には一列が三六〇メートルもある巨大な畑があり毎日その畑の草ぬきをして、八月の後半に全部終了した時は感動でいっぱいだった。バンクリーナーの先端の糞の山をくずす仕事も面白い。牛は六十キロ食べ二十キロ糞をするので、当然六十頭もいれば巨大な山が「建設」されてしまうのである。笑いながらその山を崩し楽しかった。

子牛にミルクを与える仕事。フリーマージンで生まれてきた♀の方（♀は死）が一番初めに生まれ、特に可愛かった。最初は下痢便ばかりしていたが元気になるとロープを切って逃げるのをつかまえるのが大変だった。

朝五時から十三時間労働。失敗が多く申し訳ないが、自分なりに努力して牛の勉強ができた。焼酎と新鮮な野菜やホタテ、西別川のマス等のごちそうを腹一杯食べられた。畜産学科の多くの方に別海へ足を運んでいただいて感動してほしいと思います。

別海町酪農実習

畜産学科二年　勝畑智子

「とうとう来ちゃった。」七月三十一日、あんなにあこがれていた北海道への第一歩は、以外にあっさりしたものでした。東京港から釧路までフェリーで33時間、そこで一緒に来た友達と別れ、私は電車で別海へと向いましたが一人きりで心細く、電車の中では思いっきりウォークマンで音楽を聞き続けていました。別海の駅から私のお世話になる加藤牧場までは役場の方に送っていただきました。

加藤さんのお宅では16年前から毎年実習生を受入れているそうで、加藤さん、奥さんはもちろん、三人の子供（といっても一番上は私と同い年、あとの二人も高校生）さん達も非常に実習生慣れしていて、私をすんなりと家族の一員として受け入れて下さいました。

一日の仕事は五時半の搾乳から始まります。まず放牧地から牛を呼び集め牛舎に入れ餌付し、その間に私は乳ふきを始めます。そして加藤さんと奥さんがミルカーをつけていきます。搾乳が終わると牛を外に出し、牛舎の掃除をして朝の仕事が終わります。朝食をとり、九時半頃から、今度は野菜畑の手入れ（雑草ぬきや種まき）牛舎内の掃除（窓ふきやミルカーのパイプラインふき、ろうかへの石灰ふり等）を行い、昼食になります。午後は二時頃からやはりいろいろな仕事をして四時に牛舎にいき、餌付の準備をします。まず、配合飼料を決められた量づつ配り、ビートパルプも配ります。次にサイレージを廊下の六ヶ所ぐらいに小山にして積んでおきます。搾乳牛の餌付準備の次は、若牛たちに乾草を与え配合をやります。これだけのことを私一人でやるとたっぷり四十分はかかり、終わる頃には汗でびっしょりになっていました。そして五時から搾乳、掃除と翌朝の餌付準備までして一日の仕事が終わるのは八時半頃でした。

始めの頃は仕事が終わるとすぐ眠ってしまう日が続きましたが、慣れてくると夜遅くまで留美ちゃん（次女で高三）と語り合ったりみんなでいちご酒を飲んだりして、加藤さんの家での「家庭生活」を楽しむ様にもなり

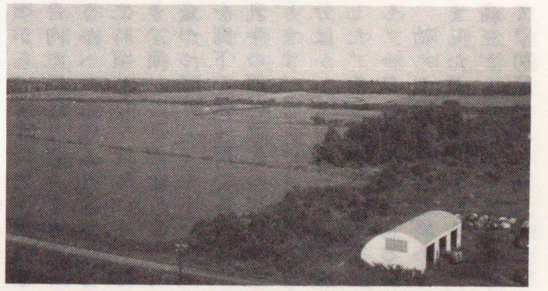
ました。

実習生だから、といって働いてばかりいたのではありません。私が畜産学科だというので、中標津の農業試験場や牛の共進会に連れていって下さったり、農大ＯＢの方を紹介していただいたりしました。その他、家族みんなで行った摩周湖や美幌峠、硫黄山、ノサップ岬etc.

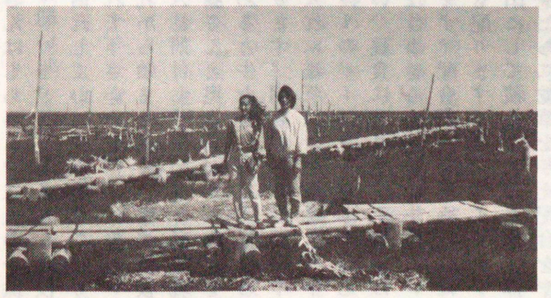
役場で開いてくれた実習生の交流会では、日本各地の人達とすぐに友達になりました。みんな「酪農実習」という共通の体験をしていたせいでしょうかみんなで「がんばろうね。」といって別れた時はちょっぴりさびしかったのを覚えています。

この実習で私が得たものは数えきれません。牧場の生活の楽しさ、つらさ、たくさんの友達、働く喜び（笑わないで！）……。友達がくれた手紙の一つに「この実習で自分自身の甘さや自分に関する事をじっくり考えられたのではないですか。」と書かれたものがあります。まさにその通りなのです。キザに聞こえるかも知れませんが、一ヵ月間自分と正面きって付き合えたことも、実習で得た大きな収穫と思っています。

九月一日、そういう訳でちょっぴりタフになった私は道東ドライブを楽しんだ後、すっかり仲良しになった北海道に「また会おうね。」と手を振ってサヨナラしたのでした。



25ｍタワーサイロより
加藤牧場



交流会　野付半島

集う学友

農大に入学して早一年

畜産学科一年　木下雅仁

私は、二年間の浪人の末、運良く農大に入学することができた少し年を食った一年生です。

何故、二年間も浪人をしていて農大を受験したのか半分だけ本音を言いますと、自分の夢へ向って一歩でも近づく為であります。後の半分は多浪生なら誰でも思うことです。

さて、私の夢と申しますのは、私の故郷を自分の手で興して行きたいということにあります。

私の故郷は、長野県の本物の山奥にあります。どの様な所かと言いますと、南アルプスの内懐に抱かれた風光明媚な所で、川の細流の音も優しく、夜には降る様な星空が人工の光に害されることなく浮んでいます。唯、残念ながら、山の傾斜が少しばかり急なため、スキー場を作ることが出来ず、谷底では、日の当る時間がわずかに少ないことです。この様な村ですから、産業と言えば、農業か林業ぐらいで、第二次・第三次の産業に携わっている人の数は――季節により多少変化しますが――微々たるものです。

私の家も農業を営んでおりますが、村の他の家がそうである様に、規模の小さな零細農家であります。所詮、前述した様な環境にあり、冬期には氷点下10度を下まわることが珍しくない気候では、あたり前の農業を営んでも、たかが知れています。畜産学科に入ったのも、少しはこの点を考慮した結果でもあります。

入学して早一年、光陰矢の如しと言われますが、この一年は本当に、その通りでした。何彼につけ、畜産について触れるごとに、自分の選択が間違っていないことを確信し、農大の畜産学科に入ることができたのは、自分の一生の殊勲の一つであった、と感じております。

今後、一順調に行けば三年間一残された大学生活で、自分が何を得ることができるか、機会を逃さずに捕えて自分の血肉としたいと思っています。

諸先生、諸先輩のもと、学友達といっしょに、日夜励み、悔いの残らない三年間（あくまで、順調に行けばの話）を、過ごすよう努力致します。



「夢」

栄養学科三年　山口由実

子どもの頃よく夢を見た。

得体の知れないオバケの出る夢や崖から落ちる夢、空を飛ぶ夢。そうかと思うと世界正服を企む悪者どもをちぎっては投げ、ちぎっては投げ、といった痛快娯楽劇的なものも見た。今でもよく夢は見るが現実的なものが多すぎて良くない。毎日顔を合せている友人や後輩が「ナントカカントカがコウして、ソウして、こう思う。」とか「コレはコウだが、アレはアアで、ソレがいい。」とか、日常と何ら変わらない顔で話しかけてくる。折角の夢なのになんで出て来るのかと目で抗議すると登場人物たちも心なしか恨めしそうな顔で「どうして私が出なくてはいけないの。」と言い返してくる。そういわれると勝手に御登場願ったこちらとしては「御多忙中申し訳ない」と思わず謝ってしまう。

そういえば、子どもの頃よく夢について作文を書かされた。

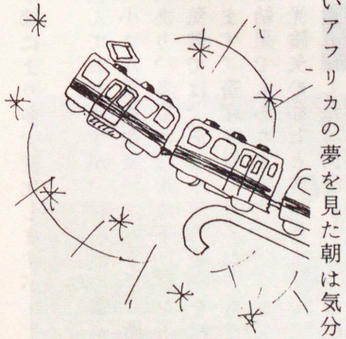
「はーい。それでは、この時間は作文を書いてもらいます。題名は私のゆめです。大きくなったら何になりたいか書いてください。」

子どもの頃これは最も苦手な作文で、大きくなったら何になるんだろうと思うと現実的なことばかり浮び、何になれるんだろうと思うとさらに現実的なことしか浮ばない。かといって、何になりたいんだろうと思っても自分の能力を考えてしまい口幅ったくてとても人前で言えない。スチュワーデスになりたいとか、看護婦さんになりたいとか言える人になりたかった。結局、最も子どもらしいと当時自分で思い、選んだ夢はケニアへ行ってライオンを飼うことであった。そのために獣医になろう。これならシュリーマンのように子どもの頃に夢を宣言してもきっと実現できる。

子どもの季節が過ぎ、年令が進むにつれて数学の点数の低下に合わせて、夢は夢となっていった。

今でもよく夢を見る。

行ったこともないアフリカの夢を見た朝は気分が違う。



「畜友会って何だっけ？」

農友会総務部副委員長　斎藤義二

最近「幸せってなんだっけ？」というCMが流行している。日頃、何気なく使う言葉の意味を、問い直す時代が来たのだろうか。

さて、学生の我々がよく使う言葉に「課外活動」という言葉がある。今回は、農友会　畜友会活動などの「課外活動って何だっけ」を書いてみたいと思う。

近頃では、大手企業も就職試験の際「課外活動」を高く評価すると言う。今後は益々その内容も真価を問われるのではないかと思う。では、なぜ課外活動をしてきた者を企業が評価するのか。課外活動の利点を二つに分けて説明する。

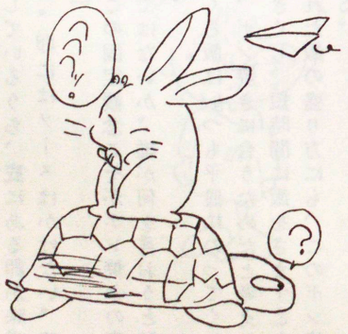
まず、そのひとつとして人間関係を学べる場であるという事。チームの目標に向い活動する上で、チームワーク、言い換えればチームの人間関係が問われるのである。

次に、課外活動を通じて模擬社会体験ができるという事である。他の団体との交渉事や、経理などの仕事を通じ、組織として社会に触れる事が出来る。また、社会なら数十年かかってやっと経験する事が出来るリーダーを僅かな年でしかもほとんどの者が経験出来るのである。課外活動を経験した学生が、「即戦力」として企業に期待されるのは、以上の理由も含まれるからであろう。

現畜産学科科長の渡辺誠喜先生が学生部長をなさっていた頃、先生から「学生生活は学友間のコミュニケーションの如何によってその真価が問われる。」と話されたのをお聞きした事がある。

畜産学科の皆さんも畜友会活動を通じて友人を増やし大学生活を有意義に過ごされる事を願って止まない。

最後になったが、畜友会会長の成瀬君以下役員の皆さんに、発刊のお祝を申し上げその御苦労に敬意を表すと共に、これからも畜友会が益々発展される事をお祈りし、筆を置きたいと思う。



美味んぼ
ああ愛しのボンボン焼き

ボン　ボン

彼はいつも「カッ鉄板焼き」の横でじっとしている。やや体勢を斜めに傾けているのは彼がｓｈｙなのだろうと思う。彼を注文する。紙に㊍とマークがつく。「ボン焼き　一つ!!」と調理場に声をかける。いよいよ彼がつくられるわけだ。強火の鉄板にといた卵を流し込み、あらかじめいためておいたらしい野菜をいれ、上に肉をおく。

「おみそしるにしますか？　スープにしますか？」まずここで第一の選択がある。私のまわりの連中は、みんな「みそしる」と答える。やはり「ボン焼きにはみそ汁」だそうだ。ボンボン焼きを和食と考えるとすると、スープは合わないことになる。

鉄板は熱いので触れないようにしながら席につく。さてここで第二の選択。ボン焼きにはソースかショーユかの問題である。私は入学以来、約百食に及ぶボン焼きを食してきたが、今までショーユをかけたことは一度もない。しかしみんなはショーユをかけるそうだ。ここ畜友会室でも、委員長をはじめ副委員長までもが、ショーユ党だ。なぜショーユを用いるのか。

「ボン焼きを構成しているうち、底にある卵が味覚を占める割合は大きい。卵にはソースはかけない。普通ショーユをつかう。」

しかし私は思う。この固定観念こそがボン焼きの真の味をだしていないのではないか。誰が何を言おうと私は断固ソースを用いる。

ボン焼きについてくる飯はいつも平皿にのってくる。これはつめたい飯が、ボン焼きに合うためだと考えられる。飯の表面積を大きくし、短時間に飯をさますことができるように工夫された飯の盛り方にも、このボン焼きのすばらしさがわかる。

たべ方については何も言わない。しかし、あえて言うならば、野菜を卵でくるんで食べるのが望ましい。こうすれば、底にある卵の意味がはっきりとわかる。昼食時混んでいると卵が充分に焼けていず、汁が多いときがある。こんな時は、野菜が多少生でも上の肉がつめたくても不平を言わず、だまってたべる。これが真のボンボン焼きのファンといえるのだ。

この場をかりて、ボン焼きをこの私に紹介してくれた、レバーソテーホシに感謝すると共に、仲間のよくばりヒロさん、ニクドンワタルに御協力を感謝し、筆をおかせていただきます。

「ONE　STEP」

畜産学科四年　古橋　一人

いきがるのもこれで最後になりそうな気がする。卒業と同時に学生というぬるま湯から、カラダ全体を出さなくてはならない。学生だからというのは甘えである。

自由だ、とにかく自由だと思ってみてもそれは社会から逃れるためにいいわけにすぎなかったと思う。酒を飲んでバカ騒ぎをしたとき、ふと冷めた目で見ているもう一人の自分に気付くことがあった。そのたびに、「与えられた価値観にしばられるな！」と心の中で叫んできた。他人の目を気にするのではなく、バカな自分にいやけがさしたからである。何かごまかしてはいないのかと。それはそれでよかったと思う。今だから思える。苦悩の日々もあっていいと思う。

結局、卒業しても思い出の他に何も残らない様な気がする。昔のことをなつかしむにちがいない。他の大学では味わえない、農大でしか感じ取れない、価値観にしばられぬ生活を。それを他の大学におしつけることはしたくない。グチもいいたくない。そんなことは学生時代だけで十分だ。それは自分自身どうするかということだけである。充実した日々でなくてもいい。勉強などクソくらえ、それ以外に何か一つ、自分以外にはできないことをヤッたか、ヤるかそれが、大学においても社会においても大切なことであると思う。

正直なところ、来年の今頃、何をしているのかと思うと、悲しくなってしまう。四年間も過ごした農大に愛着がある。いろいろな奴がいて、パチンコができて、酒が飲めて、この東京、世田谷区、農大は、自分にとって第二の故郷となった様である。

最後に、何を書いているのかわからなくなってしまって、何をいってんだと思われるかもしれないが、今の私の心境である。後輩の皆、頑張って下さい。



研究室だより

昭和六十二年度
畜産学科
卒論題目

家畜育種学研究室

柴田教授、鈴木教授、田中教授、天野助教授



家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学育種学、特に血清学、細胞遺伝学、分子遺伝学的見地から、広範囲にわたり研究活動が実施されております。

当研究室では、柴田寛三教授をはじめ、田中一栄教授、天野卓助教授の指導の下に古郡実験助手・大学院4名、4年生9名、3年生19名で構成され、室員各自の自覚と互いの協力により、それぞれの目標に向って頑張っております。

研究室における日常の活動は、実験動物の飼養管理による家畜との接触や、毎週行われている定例室員会。ほかに、卒論等の研究、実験における問題点を解決する為に、昼夜を問わず熱心に討論されております。さらに研究活動は学内だけに止まらず、先生方は学会や研究の為海外に出張されたり、また学生も他大学及び他研究機関に出向いて研究を行っております。

研究室における年間の主な行事としては、新入室員歓迎会、定期総会、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会などがあります。

因みに昭和六十一年度の卒業論文題目は次の通りです。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
チ83015	井原　安洋	韓国在来小型ヤギ血液型モノクローナル抗体作製に関する基礎的研究	天野
チ83044	木村　靖	ウシ血液型モノクローナル抗体作製に関する基礎的研究	天野
チ83050	小酒　睦子	ウサギの染色体に関する研究	田中 柴田
チ83059	澤田　由美	スナネズミの細胞遺伝学的研究	柴田 田中
チ83065	清水　伸一	ウシ正常血清中の同種内溶血素の検索	天野

チ83104	中村　実香	BLUP法を用いた乳牛の沁乳形質に於ける育種価推定について	柴田
チ83142	目黒　和広	アクリルアミドゲル電気泳動法によるブタ血液蛋白酵素型の検討	田中
チ85605	那須　広志	ウシ並びにスイギュウの血液蛋白多型に関する研究	天野
チ85608	宮島　和彦	同種血球免疫によるホロホロチョウの血液型について	田中
チ85610	劉　政堂	中国台湾系在来豚の血液型及び、血液蛋白酵素型に関する研究	田中
チ84502	曽　子超	マウスの桑実胚における分割と移植	田中 石島
チ82050	蔵　正	ウシ、ヤク及びスイギュウにおける乳蛋白型の電気泳動的差異	天野

畜産物（肉）利用学研究室

鬼原教授、松岡講師



我が、畜産物（肉）利用学研究室は、通称「肉研」と呼ばれ、教授の鬼原新之丞先生、講師の松岡昭善先生を両翼に、四年次生26名、三年次生18名で構成されています。各自の肉研究室員という自覚が強く、自分の置かれている立場をよく理解し、密度の濃い実験を昼夜を問わず行っています。

今日の世界の畜産界において、ヨーロッパを中心とし、食肉加工肉を含めた食肉産業は、年々その発展成長が著しい部門です。当研究室では、その食肉産業界に新風を送り込むべく、食肉加工に関する諸問題を扱っている研究室です。四年次生なるものは、微細にわたって、肉の化学、各種実験方法を教示し、三年次生は、卒業論文の手伝い等、実験の潤滑油として活躍しています。

このように食肉加工に関する研究を基盤としている肉研ですが、収穫祭においては、肉製品の製造及び販売を行い、地域住民との暖かい結びつきを行っています。

また、肉研の雰囲気として、四年次生と三年次生の明

確な区別はせず、いつも和気あいあいである。酒宴の席においてはなおさらそうです。この雰囲気を大切にし、学習面では、更に先輩方々の築き上げてきた研究結果と肉研精神を基盤とし、日本畜産における、すばらしい成果を生むよう、日夜努力していきたいと思っています。

又、鬼原教授が今年度をもちまして退官されます。長い間ありがとうございました。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
チ83001	相沢　正司	プレスハムの酸敗と細菌の発育に対する光の影響について	鬼原
チ83012	伊藤登久子	筋原繊維蛋白質のゲル形成能に与える超高圧処理の影響について	鬼原 鈴木
チ83016	飯伏　直巳	プレスハムの酸敗と細菌の発育に対する光の影響について	鬼原
チ83029	大野　浩示	牛肉ソーセージ製造に関する研究	鬼原
チ83033	長田　雅宏	牛肉ソーセージ製造に関する研究	鬼原
チ83057	佐藤　正敏	ロースハムの酸敗と細菌の増殖に対する光線の影響	鬼原
チ83066	志村　恵子	電気泳動法による肉種鑑別に関する研究	松岡 天野
チ83072	杉山　哲也	ロースハムの酸敗と細菌の増殖に対する光線の影響	鬼原
チ83074	鈴木　美奈	鶏ブロイラー肉の圧力処理がグリコーゲン分解に及ぼす影響	鬼原
チ83070	十文字教子	肥育豚に対するフミン酸の飼料添加効果の検討	松岡 鈴木
チ83075	鈴木　幸子	電気泳動法による肉種鑑別に関する研究	松岡 天野
チ83076	清藤　奈美	鶏ブロイラー肉の圧力処理がグリコーゲン分解に及ぼす影響	鬼原
チ83085	高橋　剛	免疫学的手法による肉種鑑別に関する基礎的研究	松岡 天野

チ83090	多田耕太郎	イノブタの肉質に関する研究発育に伴う体形質並びに理化学的正常の変化	松岡 鈴木
チ83100	豊田　雅人	免疫学的手法による肉種鑑別に関する基礎的研究	松岡 天野
チ83113	萩尾　孝	肥育豚に対するバイミクロの飼料添加効果の検討	松岡 鈴木
チ83119	久森　寧	イノブタの屠殺時体重の差が肉質に与える影響	松岡 鈴木
チ83128	堀口　知子	肥育豚に対するフミン酸の飼料添加効果の検討	松岡 鈴木
チ83130	本田　英樹	鶏ブロイラー肉の貯蔵性改良に関する研究	鬼原
チ83140	向井　眞悟	筋原繊維蛋白質のゲル形成能に与える超高圧処理の影響についての研究	鬼原 鈴木
チ83149	矢吹　浩昭	イノブタの屠殺時体重の差が肉質に与える影響	松岡 鈴木
チ83164	渡辺　築	ひき肉の貯蔵性に及ぼすガス封入包装の影響	鬼原
チ83601	赤井　秀次	イノブタの肉質に関する研究発育に伴う体形質並びに理化学的性状の変化	松岡 鈴木
チ83706	千藤　里香	飼育豚に対するバイミクロの飼料添加効果の検討	松岡 鈴木
チ82093	武田　純	温屠体除骨ブロイラー腿筋の死後ＰＨの低下とテクスチャーに及ぼす影響	鬼原
チ82158	武藤　紳輔	温屠体除骨ブロイラー腿筋の死後ＰＨの低下とテクスチャーに及ぼす影響	鬼原

畜産経営学研究室





新井助教授、石岡講師

当研究室では、現在、新井助教授、石岡講師、四年生27名、三年生30名で構成されています。

ただし、現状では室員は約半数ずつ、その室員も実情は大量の幽霊室員を抱えています。

とにかく当研究室の特徴は、研究室員の姿を認める事が、非常に困難である事が上げられます。

又、研究室の行事を知らない室員が多い事や、ゼミの人数が非常に少ない事も大きな特徴です。

当研究室では、学科内の他の研究室とは異なり、家畜を飼っていない為に、家畜当番が無い事も、研究室が空室になりやすい原因かもしれません。

年二回の研修旅行には、参加者も多いのですが、なにしろ普段からもっと研究室に参加しなければ！

三年生時には夏休みに、農家での二週間に及ぶ体験実習があります。

この実習は、はっきり言って良い勉強になり、農家に対しての理解が深まると思います。

最後に、各研究室員が目標意識をもつことが必要であると思います。

学籍番号	氏名	論文題目	
チ83004	阿部　繁之	ブロイラー生産者と生産指導側との管理方法についての考え方の相違	指導教員 新井
チ83006	五十嵐正美	群馬県下一酪農場の経営分析	木下
チ83009	石綿　弘	養豚における繁殖成績の統計内分析	新井
チ83010	磯部　好正	牛乳の多様化における低温殺菌の意義	木下
チ83017	岩井　英治	移転にともなう酪農の経営設計	木下
チ83022	内田　陽子	酪農経営における飼料調達の実態分析	木下
チ83027	大内　修一	飯舘村における畜産振興と現状	木下

チ83034	小沢　仙一	都市近郊大型酪農の経営分析―10牧場の収益性分析を中心に―	木下
チ83048	黒木　聖雄	宮崎県日向市における繁殖牛経営の動向とその改善点	木下
チ83058	佐土　明	乳用種、肉専用種の肥育牛経営上の比較	木下
チ83073	鈴木　邦俊	神奈川県における酪農の現状と問題点	木下
チ83089	田沢　進吾	秋田県における養鶏業の現状と問題点	新井
チ83107	永友　長規	企業的ブロイラー経営の経営分析	新井
チ83112	野崎　達雄	牛枝肉の格付け及び価格変動について	新井
チ83114	長谷川俊一	採卵鶏における飼料要求率を基準としたオールアウト時期の決定に関する検討	杉本 新井
チ83115	長谷川正之	輸入チーズの消費動向と消費拡大への対応策	新井
チ83116	早川　智久	近郊酪農における自給飼料生産の実態と課題	木下
チ83121	広田　勝宏	広島県における肉牛経営の現状と展望	木下
チ83126	古谷　光義	酪農における飼料給餌方法に関する研究「コンプリートフィーディングの導入効果について」	杉本
チ83139	三輪　徳尋	競争馬の未来像	新井
チ83143	森　義則	近郊酪農における糞尿処理の諸形態	木下
チ83156	油橋　久蔵	豚肉の流通機構と消費動向	新井
チ83165	和田　健	大規模養豚経営における繁殖成績の推移とその要因	新井

チ84501	大久保譲志	大規模平飼い採卵養鶏の成立条件－和歌山県養鶏場－	新井
チ84503	田中　雄次	増羽に伴う採卵鶏舎の改築と収益性の変化	新井
チ84607	平山　秀雄	牛乳の流通過程と価格形成	木下
チ81105	千田　浩也	畜産物の需給と畜産物の価格動向について	新井

家畜繁殖学研究室

一戸教授、石島教授、門司講師



我が家畜繁殖学研究室は、一戸教授、石島教授、門司講師、阿野副手の指導のもと、大学員生2名、四年生38名、三年生28名の室員で構成されています。室員は、各自の希望する家畜・家禽別に、牛班、豚班、家禽班、実験動物班の四班に別れ、第一実験室（家禽）、第二実験室（大中家畜）、第三実験室（実験動物）の三つの実験室で、精子、卵子やホルモンの研究に励んでおります。

各動物班では、週に一回ゼミナールを開いて、文献を読んでの討論、卒論の説明など、お互いに知識を交換し研究をより一層中身のあるものにするようにと、努力しています。

また、当研究室は家畜人工授精の講習を受けるにあたっても、普段から家畜繁殖に関する研究にたずさわっているので、日常飼育管理の中から学びとれるものがあることと思われます。

研究の主要テーマとしては「家畜の人工授精に関する研究」、「家畜の繁殖生理に関する研究」、それに、今話題のバイオテクノロジーの一環でもある「家畜の性現象の人為支配に関する研究」と様々です。

また、当研究室においては、研究室の中だけでなく、広く世界的にも視野を向けており、特に近年では、フィリピン、スリランカなど東南アジアにおける水牛及び野鶏の研究が毎年行われ、室員を外地に派遣し、フィリピンにおける人工授精の確立及び在来鶏・野鶏の生理を繁殖学的に究明せんと日夜努力を積み重ねています。

その他、我が研究室では、コンパも多くひらかれますが、大人数のわりにはまとまっているので、より一層団結し、収穫祭では毎年その成果が発揮されます。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
チ83003	安達亜紀子	家兎胚の錠剤化凍結に関する研究－特に凍結融解胚の生存性について－	石島
チ83020	上田　雅一	岐阜地鶏の産卵能力に関する研究－特に卵胞の急速成長について－	一戸
チ83037	亀山　祐一	マウス受精卵の子宮内転移に関する実験的研究	石島
チ83051	小林　敬一	ラットの非外科的受精卵移植に関する研究－特にRecipientの月齢が妊娠成績に及ぼす影響－	石島
チ83053	後藤　範雄	ウサギのキメラ作出に関する研究	石島
チ83055	酒見　力	岐阜地鶏雌鶏における腺性下垂体プロラクチン細胞のPAP法による同定	一戸
チ83063	島田　久一	豚精液の凍結保存に関する研究－特に活性ビタミン剤添加が精子生存性に及ぼす影響－	門司
チ83067	鄒　俊毅	台湾の養鹿事業の実情と今後の課題	石島
チ83069	新村　嘉久	錠剤化法による豚精液の凍結保存に関する研究－特に保存期間の差による精子生存性について－	門司
チ83078	関野　佳子	雌鶏の性成熟に伴う卵巣の組織学的変化及びNaの検出	一戸
チ83080	体岡　正行	豚精液の凍結保存に関する研究－特に豚希釈液中のSLS存在下における精子形態の異常と細胞中酵素との関係について－	門司
チ83081	平良　隆	HMGによる幼若モルモットの過排卵誘起に関する研究	石島

チ83 084 高橋さやか 牛の受精卵移植に関する研究 門司
ー特に胚の切断方法についてー

チ83 086 高橋 伸彦 牛の受精卵移植技術の現状に 一戸
ついて 吉田

チ83 087 高橋 正行 スナネズミの反復過排卵誘起 石島
に関する研究

チ83 092 立山 松男 畜産におけるバイオテクノロ 一戸
ジーの現状について 門司

チ83 091 多田 裕 未成熟雄ウズラにおけるクロ 一戸
アカ腺機能に対するTestosterone及び5α-
DHTの影響

チ83 093 田辺 一明 山羊精液の凍結保存に関する 門司
研究ー特に融解温度が精子生
存性及び乳酸蓄積量に及ぼす
影響についてー

チ83 095 俵 準一 凍結処理過程における山羊精 門司
子の代謝能及び、生存性にお
よぼす各種希釈液の影響につ
いて

チ83 108 名倉 義夫 豚精液の凍結保存に関する研 門司
究ー凍結処理方法が精子生存
性及び酵素消費量におよぼす
影響についてー

チ83 120 日野 圭一 東京都23区内における中型イ 一戸
ンコ類（主にワカケホンセイ
インコ）の二次野生化及びその
生息繁殖状況について

チ83 122 福地可奈子 錠剤化法による豚精液の凍結 門司
保存に関する研究ー希釈液・
融解液の差異が精子生存性な
らびに乳酸蓄積量におよぼす
影響ー

チ83 129 本郷 茂 未成熟雌鶏の卵巣の成熟に伴 一戸
うDNAおよびProtei
n量の変化について

チ83 145 八重樫朋子 豚精液の凍結処理過程が精子 門司
アクロソームに及ぼす影響に
ついて

チ83 147 安池 正人 家畜精子の走査電子顕微鏡に 門司
よる表面構造の研究ー融解温
度がおよぼす精子頭部の形態
変化についてー

チ83 150 山内 寿子 チャイニーズハムスターの過 石島
排卵誘起に関する研究

チ83 151 山上真木子 山羊精液の凍結保存における 門司
希釈液の条件が精子アクロソ
ミックシステムに及ぼす影響
について

チ83 152 山口 幸洋 豚精液の凍結保存に関する研 門司
究ー特に希釈液の違いによる
細胞内酵素の消長についてー

チ83 161 吉野 仁士 分光光度計による山羊および 門司
豚精液の精子数簡易急速算定
法について

チ83 163 渡辺佳世子 過排卵処理家兎の着床前後に 石島
おける子宮液のALP値の推
移について

チ85 603 加藤 昌弘 未成熟雌鶏の卵巣の成熟に伴 一戸
う血中β-リポ蛋白量の変化
について

チ83 705 城迫 邦子 ゴールデンハムスターの受精 石島
卵移植に関する研究ー特に移
植適期の検討ー

チ82 108 富樫 直人 北海道における牛受精卵移植 一戸
に関する現況調査 門司

チ82 151 松永 直樹 雌ホロホロ鳥における産卵率 一戸
および性ステロイドホルモン
の季節的変動について

チ82 062 後藤 幸仁 豚の繁殖に関する実態調査 一戸
門司

チ82 063 權堀 和浩 宮崎県における和牛の受精卵 一戸
移植に関する現況調査 門司

チ82
088　高野　敏彦　九州地方における牛受精卵移植の実態調査　一戸　門司

乳利用学研究室





山中教授、古川講師

当研究室は、山中良忠教授と、昨年度信州大学からお迎えした鴇田文三郎嘱託教授、及び古川徳講師の三先生の御指導のもとに、大学院生2名、四年次生5名、三年次生18名、二年次生1名という比較的小数ながらも、ユニークな人材が集まり、全室員が皆協力しあってより豊かな環境づくりを志しています。

今日、多様化する我々の食生活においても、古来より人間に利用されて来た乳と卵は重要な位置を占め、様々な種類の製品がスーパーや売店に並んでいます。当研究室では、乳・乳製品及び卵・卵製品の将来を見つめながら、蛋白質素材、副産物等に関する理化学的研究、及び食卵の品質低下防止、発酵製品と発酵中の変化等の微生物学的研究、さらには畜産物の生理活性についてといった広い範囲から、各自の研究テーマに向って日夜励んでいます。

その他の主な活動としては、毎週の文献輪読会、一年生の基礎化学実験の指導補助、五月に新入室員歓迎会、そして夏には乳製品製造実習、秋の収穫祭参加と初冬の室員旅行、二月には卒業論文発表会、卒業生送別会、また畜友会ソフトボール大会参加等があり、こうした行事には他に類のない団結力を発揮させ活動しています。

学籍番号	氏名	論文題目	
チ83005	新井　聡	発酵乳の成分組成とそのBR	古川
		Mの化学分析	山中
チ83062	島迫　幸治	マウスにおよぼす発酵乳の生理効果	古川 鴇田
チ83098	富樫　正子	卵白のリゾチーム活性におよぼすPHと加熱の影響	山中 古川
チ83106	中山　美奈	ホエー蛋白質区分の電気泳動的差異について	鴇田 山中

家畜飼養学研究室







杉村教授、伊藤助教授、栗原講師

今日我が国の畜産界は、世界的な穀物需給不安定による飼料価格の値上りの懸念、食品安全上の要請から配合飼料添加物の規制強化など依然として厳しい環境の中で家畜飼養学および家畜飼養学研究室の占める位置は、ますます重要になりつつある。

「食こそ、生」。これは、人間だけでなく、家畜にとっても重要なことである。家畜飼養学は、学問的分野としても広い範囲にわたっている。すなわち家畜飼養・管理・飼養という三本柱のもとに、杉村敬一郎教授、伊藤澄麿助教授、栗原好雄講師を中心とした指導のもとに種々の研究活動を行っている。

主な研究テーマとしては、アミノ酸、脂肪酸、エネルギー代謝、サイレージ、牧草、飼料管理、飼育管理等があり、多方面にわたり行われている。

研究室行事としては、富士農場における畜産実習、群馬県畜産試験場、浅間育成牧場に於ける家畜管理実習ならびに、一般飼料成分分析演習等を行っている。また室員相互の親睦を計るために、収穫祭の文展・模擬店への参加、ソフトボール大会、研修旅行、餅つき大会等を行なっている。

学籍番号	氏名	論文題目	
チ83007	池上　幸生	主題	指導教員
		モミ殻の飼料化に関す研究	伊藤 栗原
		副題	
		加湿粉砕アンモニア添加サイレージの飼料価について	
チ83011	伊藤　勝利	豚皮の食品化に関する研究	杉村
チ83014	伊藤　周	赤血球アミノ酸輸動におけるアスパラギン酸、グルタミン酸、プロリンの役割とATPアーゼへの依存に関する研究	杉村
チ83019	上田　敏英	グラスサイレージ調整時における水分含量が品質に及ぼす影響	伊藤 荻原
チ83024	永福　和明	動物の飢餓が体脂肪の組成に及ぼす影響	伊藤 栗原

チ83031 岡野 秀樹 主題 モミ殻の飼料化に関する研究 伊藤 栗原
副題 加湿粉砕アンモニア添加サイレージの品質について

チ83039 川上 一好 飼料中の未消化物量の相違が白色レグホーン種の産卵及び消化率に及ぼす影響 伊藤 栗原

チ83042 川畑 康成 環境温度の相違が子豚のエネルギー代謝に及ぼす影響 伊藤 鈴木

チ83045 清田 義昭 器官のホモジネートを培地としたときの赤血球におけるアミノ酸輸動 杉村

チ83052 是永 博基 主題 牧草地におけるエゾノギシギシの生態的防除に関する研究
副題 裸地の形状の違いがエゾノギシギシの生育に及ぼす影響 根本

チ83099 富田 恭正 環境温度の相違が子豚の成長に及ぼす影響 伊藤 鈴木

チ83109 新村 達夫 培地中アミノ酸の単一欠如が赤血球の（E_2－K）ATPアーゼ活性に及ぼす影響 杉村

チ83124 古田 多美 家兎骨肉粉の飼料化に関する研究・特に幼雛における消化発育に及ぼす影響について 伊藤 栗原

チ83125 古橋 一人 環境温度、特に高温が中雛のエネルギー代謝に及ぼす影響 伊藤 栗原

チ85605 関田 克利 飼料中の不消化物量の相違が白色レグホーン種の産卵及びエネルギー代謝に及ぼす影響 伊藤 栗原

チ85606 二宮 崇 主題 モミ殻の飼料化に関する研究
副題 加湿粉砕アンモニア添加サイレージの化学組成について 伊藤 栗原

チ85609 吉原 芳信 グラスサイレージ開封後の生菌剤（バチルス・トヨイ）添加が好気的変敗に及ぼす影響 伊藤 荻原



家畜衛生学研究室

東教授、近江助教授、渡辺(忠)講師

本研究室は、東量三教授、近江博明助教授、渡辺忠男講師、各先生の御指導のもと、4年生24名、3年生20名、2年生1名の室員一同が一体となって活発なる研究室活動を行なっている。

研究室活動としては、室員各自希望する家畜、家禽別に分け、牛班、豚班、鶏班、実験動物班の4班に分かれ各家畜、家禽の疾病に対する予防法及び糞尿処理、環境衛生など研究を行なっている。

また本学家畜診療所においても一般外来動物の診療を中心に各種の研究活動が行なわれている。

その他研究室の活動内容は、年間行事として新入室員歓迎会、ソフトボール大会、収穫祭参加（文化学術展、模擬店）、研修旅行、送別会、定例会、ゼミナールなどがある。

このような、多面活動において学生生活の充実を計り室員各自の個性を引き出し、その個性をもちより研究室独自の個性を創造するという事に我々は目標をおいている。

学籍番号	氏名	論文題目	
チ83002	赤林 竜	犬消化管内寄生虫に対する生薬（電丸・檳榔子）の駆除効果について	指導教員 近江 東
チ83003	石橋 敦	牛の皮膚糸状菌症の菌検索と治療について	近江
チ83018	岩瀬 尚哉	屠殺豚の扁桃の菌検索について	東
チ83028	大澤 潤二	犬の歯石に由来する細菌・特にグラム陽性桿菌について	東
チ83030	岡田 哲子	犬糞の処理に関する研究－肥料としての有効性について	近江 荻原

チ83 036 金子孝太郎 養鶏の光線管理下における衛生昆虫の動態について 渡邉

チ83 040 川上 恵 犬の人工避妊に関する研究ー結紮法についてー 近江 東

チ83 041 川瀬奈津美 犬の温泉療法に関する研究ー家庭用入浴剤の保温性についてー 近江 東

チ83 043 北村佳奈子 フミン酸投与における豚の血液中のコレステロールならびに、トリグリセライドの変動について 近江 吉田

チ83 049 小泉 潤 路上排泄犬糞の内部寄生虫に関する研究ー沈殿法による虫卵の検出について 近江 東

チ83 061 渋谷 栄一 ホロホロ鳥雛腎臓培養細胞の応用に関する研究 渡邉 東

チ83 064 嶋本 勇 犬におけるペントバルビター ル製剤を主軸として麻酔効果の検討 近江 東

チ83 088 武田 典夫 豚糞処理方法の種類とその比較考察 新井

チ83 096 辻 隆二 路上排泄犬糞の内部寄生虫に関する研究ー浮遊法による虫卵の検出について 近江 東

チ83 697 土田つかさ 猫の尿臭に対するグルメート配合飼料の消臭効果について 近江 東

チ83 110 野口 龍生 北海道音更地域における乳牛の内部寄生虫卵保有状況について 近江 東

チ83 123 藤田千可子 犬の歯牙異常に関する研究ー歯石の付着状況について 近江 東

チ83 127 保土田宣道 トリアデノウィルスに対する ホロホロ鳥の感受性について 東 渡邉

チ83 135 三浦 伸子 猫消化管内寄生虫に対する駆除法の検討 近江 東

チ83 136 水野 寿通 ホロホロ鳥に対するニューカッスル病生ワクチン接種法の検討 渡邉 西脇

チ83 141 室越 孝 千葉県佐倉市近郊における牛感染病の野外抗体調査 近江 吉田

チ83 157 吉田 敬 犬の失血性貧血に対する治療法の検討 近江 東

チ85 602 市戸 等 栃木県那須郡近郊における野外抗体調査 近江 吉田

チ82 068 佐藤 光晴 最近における子犬の消化管内寄生虫卵の保有状況について 近江

チ82 122 長濱 陽介 東京西南部に生息する一群の中型インコの生態 渡邉

チ82 166 八谷 健治 神奈川県厚木市近郊における豚の内部寄生虫卵保有状況について 近江 鈴木

チ82 106 都築 英成 ミヤリサン投与の雛の免疫抗体産生能に及ぼす影響 近江

家畜生理学研究室



渡辺教授

生理学とは、国語辞典でひくと「生物体のはたらきを研究する学問」であると記されています。科学がいくら進歩したといっても、まだまだ生物体には、謎の部分が多いのです。また既に解明されていると思われる事柄でも、その謎の部分を人間に都合のよいように解釈して、正しいこととしているのかもしれません。生物体の複雑且つ精巧な機構を解明する為には、地道な実験の積み重ねと、得られた結果に対する正確でしかも客観的な判断力が要求されます。

我が家畜生理学研究室では、前記の事柄を常に念頭に置き、「家畜・家禽の代謝に関する生理遺伝学的研究」「家畜・家禽の体液に関する免疫学的並びに血清学的研究」「家畜・家禽の細胞膜に関する研究」「家畜・家禽の内分泌生理に関する研究」の四つを主要テーマとして、それぞれ畜産物の生産向上という畜産学における一大目標に向って日夜励んでいます。

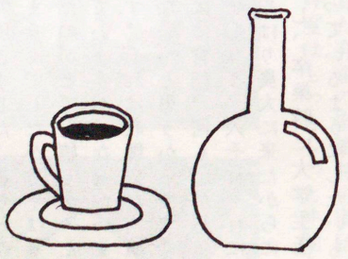
室員構造は渡邉誠喜教授をはじめとして、岩崎、半澤

室賀各副手、院生1名、四年次生19名、三年次生12名、よりなり、研究室としては、中堅クラスと考えています。飼養家畜は、めん羊、やぎ、兎、モルモット、鶏、鶉と種類も飼育頭羽数、共に豊富であるため、これらの日常管理に苦労することもありますが、その半面これら動物に直接する機会が多く、学生室員自身の経験から、多くの事柄を学び取ることができて非常に有意義であり、且つ楽しいものがあります。室員の構成人数が比較的少ないため学生一人一人の存在が大きく、且つ重要なものとなっており、それだけに自分というものを出していくことのできる研究室だと思います。

研究室の年間行事としては、新入室員歓迎会、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会なども行なう一方、年間を通じて週一回の室員によるゼミナール及び談話会、学外講師による特別講演会、富士農場実習などがあり、これらの成果を室報にまとめて発行しております。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
チ83021	内田　和久	鶏の加齢に伴うケラチンの電気泳動的並びに血清学的性状の変化	渡邉
チ83032	岡本　範子	鶉の分泌型免疫グロブリンの性状	渡邉
チ83038	河合　恒祐	めん羊赤血球のAriginase 6N. 3の生理化学的性質について	渡邉
チ83047	隅　佐和子	馬赤血球中のアルギナーゼ型の遺伝様式の検討	渡邉
チ83133	松前　晴美		
チ83083	高梨　昇	鶏の成長に伴う血液中の遊離アミノ酸組成の変動	渡邉
チ83094	谷口貴代美	鶏の卵黄蓄積に伴う血清ホスビチンの生理化学的性状の変化	渡邉
チ83103	中村　邦子	馬及びめん羊の赤血球遊離アミノ酸型と赤血球膜のアミノ酸取込み能並び生理的諸形質との関係	渡邉
チ83118	原　ひろみ	鶏の細胞性免疫特に免疫細胞について	渡邉
チ83134	松本　茂昌	鶉赤血球膜の機能に対するステロイドの影響	渡邉
チ83138	宮野英二郎	鶉羽毛蛋白質の加齢に伴う変化	渡邉

チ83144	森山　正二	ウズラの成長に伴う血清中の遊離アミノ酸組織変動	渡邉
チ83146	八木下浩美	鶏の胸筋蛋白質のIsoformに対する性ステロイドの影響	渡邉
チ83148	柳沢慎一郎	兎のMELANOPHORE-STIMULATING HORMONの色素細胞に対る作用について	渡邉
チ83158	吉田　博美	鶏の筋種によるIsoformの違い	渡邉
チ83159	吉田　幸夫	鶉の性成熟に対する光線の影響、特に異なる波長（色調）について	渡邉
チ80122	堤　啓介	異種動物間における血清アルブミン及び免疫グロブリン（I・G）の抗原性の違いについて	渡邉
	室賀　聡	鶏の羽毛及爪の蛋白の電気泳動的並に血清学的差異の検討	渡邉



収穫祭だより

収穫祭宣伝隊・副隊長を終えて

畜産学科一年　近藤満之

〝やっぱり収穫祭は宣伝隊が最高！〟というのが、宣伝隊副隊長だった私の気持です。私が収穫祭でやりたい事、これは、思いっきり騒いで思いっきり楽しむ事でした。それを委員長だった三年生の西川さんに話した所、「じゃあお前は俺といっしょに宣伝隊をやろう。」と言われ、他の三年生の人一人を合わせた約三名を中心に興作りに取りかかりました。宣伝活動は都内宣伝パレードと経堂パレードがあり、私はそれぞれのパレード用の興作りをしました。つまり牛と鶏を作ったのですが、牛の場合、白衣を巻いてしっぽを作り乳首はスポンジでしかも足の汚れ具合もというように、そこまでこだわってやっているととても楽しく、夢中になって興を作っていました。鶏の方は延々と羽根作りが続いたにもかかわらず、出来上がった時はとてもうれしいものでした。そしてパレード当日、皆がかついでいる興を見ていると、「あの興は俺達が作ったんだなあ……。」という何とも言えない良い気分にさせられました。

収穫祭の全日程を終え、しばらくした後行われた畜産学科の収穫祭慰労会で、私は宣伝隊としての活動を始めてから今までを振りかえってみました。やはり一番、心に残った事は興作りでした。特に農大全体としての、牛の興作りでは責任者が三年生の人でしたが、その人が一年生である私にやりたいようにやらせてくれたのがとても嬉しく思っています。そして鶏の製作でも目や口ばしを私にまかせて頂きました。こちらの方は出来具合があまりよくありませんでしたが、やはり私に好きなようにやらせてくれたのがとても嬉しかったです。今でもこの嬉しさを覚えていますが、なぜかいまひとつ残念に思うことがあります。それは収穫祭を内輪の者だけで楽しんでいたのではないかと思うからです。宣伝パレード・特別企画・それに体育祭、何もかかわらずに終わった人が何と多いことでしょう。人それぞれによって楽しみ方は違いますが、やはり農大に来たからには農大の行事にも積極的に参加し、卒業時に大学生活を振りかえってみて、何かが残っているようにしたいものです。私は卒業し、社会に出てから、「農大はどんな所だったの？」と聞かれて堂々と胸をはって答えられる様にしたいです。

まあ、長々と話してきましたが、皆がこういった行事に目を向けるようにするのが、現在私の入っている畜友会役員の役目、これからも頑張っていきたいと思っています。今の気持変らないと約束するわ、男だてら、紳士同盟。な・ん・て・ね！

前夜祭・特別企画

畜産学科二年　深津弘行

第九十四回の畜産学科の特企は、奇妙で質素な昼食会からはじまった。これは、仲間づくりの一環として行ったつもりだが、みんなただ黙々と食べるだけで終わってしまった感じもする。

「壮絶な収穫祭」という言葉がぴったりの今年の特企。人数が少ないため、前夜祭の主役から、ステージに上がりっぱなしの人もいれば、当初は「セリフはたった一つ。」と言われたもののいざはじまると野劇の準主役になっていた、京都弁の酪農家ヒロさん。入学から委員長とつき合っていた大道具責任者。千葉県からの遠いところがんばって練習にでてくれた野劇のシンデレラ。帰ってきた青春時代、とはりきってくれたサーティーズ。とにかくでてくれた美人コンテスト。肉を売り売り協力してくれたミス畜産。北門、体育祭、特企、と文句が言えないとわかっていてつらかった役員一年生達。とにかくみんなの協力があって今年は総合五位になった。つらいながらも、「楽しかった。」と言えることは、私も含めてうれしいことである。

特企は、前夜祭も含め一つのテレビ番組である。構成、台本、音楽、これらが一体となり役者も含め、スタッフは客席に表現しなければならない。いくら身内が楽しんでも、見せたものがおもしろくなければならない。その難しさを今年は身をもって感じた。

一つ一つの企画をていねいに仕上げていく。頭脳と体力、技をつかうのだ。それだけにやりがいもある。今年は、林学科の優勝でおわった。その表彰式。林学科の胴上げを目前に見た今年の畜産特企軍団の心境はみんな一緒だと思う。今度はもっともっと仲間を増やして、がんばろう。





前夜祭・特別企画

委員長　深津弘行（二年）
副委員長　福崎直美（三年）
　　岡田純人（一年）
会計　森期子（一年）

スタッフ

吉良佐和子　李忠憲
近藤満之　塚本渉
三輪徳尋　浜田直樹
星山孝男　中島郁郎
廣瀬輝明　古谷栄
藤城小百合　古橋一人
本多圭子　谷田部優子
山田隆明　古田多美
神永憲一　平林直人
宮川幾代　国米かおり
小林由起子　長田尚智
森田秀秋　高橋幸宏
真島順一　折原健太郎
（順不同）

総合の部　第五位

美人コンテスト　浜田直樹（二年）　8位
Mr・農大　西川二朗（三年）　3位
Miss・農大　谷田部優子（三年）　5位
本多圭子（二年）
吉良佐和子（一年）
先生のど自慢　半沢恵先生（生理研）　15位
学生のど自慢　古橋一人（四年）
宮川幾代（三年）
西川二朗（三年）
福崎直美（三年）
深津弘行（二年）
古谷栄（二年）
野外劇　第三位

第94回収穫祭・体育祭をおえて

畜産学科二年　塚本渉

今年度、畜産学科統一本部本部体育祭委員長を務めました塚本です。

さて、私が担当した体育祭ですが、総合十二位、これは、はっきりいってドンケツなのです。昨年に続き体育祭において二年連続のビリだった訳です。もちろん初めからビリを狙っていたわけではありませんでした。それなりに一生懸命準備をしてきました。この体育祭の委員長になるというのは、自分が、畜友会という団体に入ってからです。まず西川二朗三年、畜友会委員長に今年の屈辱を晴してくれ、俺の仇をとってくれと頼まれ、畜友会へ入って西川さんの下、一生懸命働いて来ました。一年生が畜友会にも入り、いよいよ活気づいてきました。今、想い返せば一年生には、何も教える事のできない先輩だったように思います。そして夏休みにおける一年生の夏期農業実習で体育祭の説明をしましたが、はっきりいって自分自身完全に把握していないものを説明した所でいったい誰が理解をし、私についてきてくれるのでしょうか？　十月一日に行った畜産学科統一本部本部開きでは、かなり大きな事をいいました。それは体育祭にかける私の意気込みだったんです。思い起せば、昨年の十月四日の体育祭では、開会式参加人数十五人、競技もほぼ同数で全種目参加したのです。今年は、こんな事にはならないぞ。とほとんどその事ばかり考えていました。

しかし結果は、昨年と同様でした。本当に悲しかったです。自分の力のなさにいやになりました。バックボード製作、体育祭の象徴ともいえるバックボードの製作さえ、三名しかいなかったのです。マスゲームにおいても同じ事、本番当日にいる人間を集めてやりました。すべて人員の必要な競技なのです。多種目がありますが、約三十人程で全競技を行ったわけです。これは、自分が人数を集めなかった事、一年生への協力願いをするのがあまりにも少なかったからだと思います。現一年生の皆さん、いや四月より二年になる皆さんや、新入生の皆さんの力が本当に必要なんです。皆さん悔しくないですか？自分達の学科、畜産がこんなに弱い学科などといわれるのが、自分はいやです。もう二度とあの屈辱を味わいたくありません。体育祭が終わってから人前では絶対に涙を出しませんでした。他の学科へ悔し涙を見せたくなかったからです。畜友会の一年生もよくがんばってくれました。体育祭、特別企画、前夜祭、収穫祭における全部を掛け持ちして、みんな不満があったと思います。そして一言もぐちをいわず働いてくれた一年生に私は、心からお礼をし、本当にありがたく思っています。自分の

家に帰ってから、私は涙がとまらなかった。自分の力のなさと、一年生への感謝の気持でいっぱいでした。

今、この状態を打開しなければ、ずるずるといってしまうでしょう。このような事態にならないためにもみなさん（四年生から一年生）が団結しなければいけないと思います。たしかに農友会、サークル等も忙しいと思います。だが農友会部員、サークル役員である前に畜産学科の学生なんです。みなさんと団結し、学科を盛り上げれば必ずや収穫祭において良い成績を残せると思います。みなさんの協力を心よりお待ちしております。

体育祭

総合　第十二位

バックボード設計・製作

塚本　渉（二年）　太田　伸久（二年）

神永　憲一（一年）　富沢　寛（一年）

吉良佐和子（一年）　岡田　純人（一年）

神谷　悦寛（一年）

競技の部

先生バンザイ（第二レース）　第四位

綱引き　第二位

教職員対抗リレー　第六位

農大健児の意気を見よ（第一レース）　第二位

農大競馬（第二レース）　第二位

1/10マラソン　第八位

仮装行列　第九位

マスゲーム　第十二位

櫓装飾　第七位

応援合戦　第十二位

体育祭協力者

各研究室の方

（二年）相原　喜嗣　梅原　修　太田　力

大田　伸久　小林　憲平　斎藤　大治

佐藤　政和　田中　章夫　田中　勝美

田中　孝次　中島　郁朗　濱田　真樹

廣瀬　輝明　深津　弘行　古谷　栄

星山　孝男　丸山　均　石和田健二

（一年）田口　英明

岡田　純人

近藤　満之

李　忠憲

国米かおり

体育祭参加された先生方ありがとうございました。参加者名簿を紛失しまして、名前を書くことが出来ない事を御詫びします。



家畜苑

委員長　成瀬　薫

一年前、ある男達の噂を聞いた。その男達は収穫祭の最終日、涙を流したっていう噂。その涙がどんな意味を持つのか、俺には解からなかった。でも何だか知らないけど、むしょうに羨ましかった。大学入って二年間、収穫祭見て来たし、多少の参加はしたけど、一度もそんな経験した事なかた。そんな俺に噂の男達の一人が近づいて来て言った。「収穫祭で家畜苑やらないか。」その一言が俺の人生を変えた。それ程の事でもないか（？）まぁ何はともあれ、それがきっかけだった。

本気で考え始めたのは、6月中旬である。まず前年度委員長の体岡さんに設計図の事を尋ねた所、おもむろに人差し指でこめかみのあたりをポンポンと叩き、「設計図は頭の中。」毎年、設計図を書く人はいないそうだ。目の前が暗くなった俺は、研究室を出て、家畜苑の舞台である四号館の前に行った。外は雨だった。6月の長く冷たい雨は、前途多難な家畜苑を象徴している様な感じがした。

前日の雨が、まるで嘘の様に晴れ渡った空の下で、家畜苑は第一歩を踏み出した。まず四号館前の地形を知るため、樹や電柱の位置などを測り見取図を書き、それを元に設計図を書いた。その過程の中で家畜苑のスローガンが決まった。

「農大キャンパスに牧場を造る。」

収穫祭に来る人の大多数は、牛や豚と生活しているわけではない。東京で普段見る動物と云えば、犬や猫か飼っているインコぐらいだろう。中には家畜や家禽などは、本かテレビでしか知らない人もいる。そんな人達に、普段何気なく飲んでいる牛乳、何気なく食べている肉や卵その元である動物の姿を、よく見てもらいたい。

「食べる。」この言葉は、この世に生を受けた全ての動物の共通点だし、生きていく上で最も重要な言葉だ。俺達人間はこの言葉の欲求を満たすため、乳や肉を横取りするために動物を飼っている。それが家畜や家禽だ。だからせめて、動く姿を見てもらいたい。臭いにおいを知ってほしい。においが臭いのは当たり前、香水かけていいにおいがするのは、動物の中で人間だけ。そんな当たり前の事を認識してほしい。

さて家畜苑、設計図が出来上がったころ、夏休みに入り前期テストと続いて、本格的に始めたのは10月13日からだった。まず鉄パイプの運搬、昨年よりも規模を広げたため、膨大な数だった。スタッフ、有志合わせて25名程で行ったのだが2日かかった。そして組み立て、皆始め手慣れてないため多少戸惑いがあったが、徐々に慣れ

瞬く間に出来上がっていった。しかし、世の中そんなに甘くない。四号館前は先生方の駐車場であり、ついに苦情が出た。先生方にすれば当然である。そこで鉄パイプの組み立ては一旦中止し、装飾を開始した。これも始め調子良かったのだが、一人また一人とスタッフが倒れていった。連日午前2時まで行い、そのほかに研究室の文展、模擬店などの準備も手伝っている。中には実験の合間に来てくれる奴もいる。倒れない方がおかしい。そんな中で、収穫祭当日までに完成しないんじゃないかと云う不安がもち上がって来た。その不安は打ち消しても打ち消しても、大きくなって来る。そんな不安を打ち消してくれたのは、元気なスタッフの姿と有志の人達だ。例えばパンフレット製本の時、始め三人だけだった。しかも部数は去年の倍である。半分ヤケ気味で印刷を始めた。なかなか仕事がはかどらず、イライラし始めた時、文展の準備で残っていた衛研のメンバーと乳研の何人かが手伝いに来てくれた。五千枚の紙は、瞬く間にパンフレットに変っていった。それと鉄パイプの件では育種研、設計図を書いた当初、高さ5mのサイロなど大きな装飾を考えていた。が、助成金の削減や時間的な問題などで中止した。そして鉄パイプはかなり余った。何とかしなければならない。移動するにしても人数が少ない。そんな時、育種研のメンバーが手伝いに来てくれた。使わない鉄パイプだと知っていてである。今の世の中、人情紙風船が当たり前、まして中学、高校と違い大学である。隣が何をしようが無視するのが当然だと思っていたのに、この二つの出来事は、そんな思いを「スカッ」と打ち消してくれた。

そんな日ばかりが続いたわけではないが、何はともあれ、準備は進み完成は近づいた。そしてついに家畜の運搬。今年の目標である「牧場」らしさを出すため、肉用乳用合わせて仔牛7品種、ホルスタインの成牛2頭、水牛2頭、鶏7品種である。数が多いため、運搬は2日に分けた。まず一日目、富士畜産農場、午前一時に出発し途中少し休み、到着したのは明け方だった。朝日が富士の裾野の山々に広がり、日本の夜明けの美しさに声も出なかった。同時に希望で胸がふくらんだ。

朝の搾乳の終了を町、仔牛7頭を乗せた。かなり無理がある。本来ならば2台で来るのが妥当だが、一台のトラックが午後からしか都合つかない。時間が無い。無理を承知で出発する。富士農場を出るまで、3回縛り直した。走り出し、5分に一回、荷台を見ながら走った。大丈夫だ。しかし用賀のインターを降りた所で、ジャージーが倒れ、その上にアンガス、ホルスが乗っている。トラックを降り、荷台の牛をかき分け何とか起こした。周囲の車から視線を感じたが、そのまま走った。構内に入った時は、ほっとした。仔牛を無事降ろし、今度は二台で出発。成牛2頭と一週間分の飼料を運ぶ。作業が進んでないため、俺は学校に残った。バックボードなど装飾物を取り付けた。4時を過ぎ、到着の連絡が入っても

いいはずだ。電話が鳴った。一台のトラックからだ。途中ではぐれたと云う。すぐ富士に向う様に伝え、富士農場に電話した。もう一台は今、着いたと云う。それから待った。雨が降って来た。しかし遅い。トラックの音のするたびに外に出た。違う。ひたすら待った。もう誰も話そうとしない。「プァプァーッ。」帰って来た。10時15分だった。

翌日、朝から2台で厚木農場へ向った。水牛と鶏と飼料を運ぶために。昨日とは違いスムースに事が運び、無事に到着する事を信じて疑わなかった。よく晴れた日で、平和そのものだった。突然「ガタンッ。」と云う音と共に平和は去った。一頭の水牛のロープがはずれた。東名高速の用賀と厚木のほぼ中間地点である。左に寄り路肩に止めたのだが、水牛の暴れ方がひどいので、トラックがひっくり返りそうになった。助けを呼ぼうにも、周りは時速80㎞以上で走っている車ばかりである。自分達だけで何とかするしかない。俺と田原で水牛を押えつけロープで角を縛った。田代と熊沢は余ったロープで荷台の周りを縛り補強した。運が悪ければ4人とも命を落としていたかもしれない。学校までの道のりの長かった事、無事着いた時には、何とも云えない気持だった。

11月1日午前5時、やっと完成した。収穫祭初日の朝である。ギリギリだった。様々な重いが頭の中をよぎった。製作中の一人一人の真剣な顔が浮んでは消えた。時には口論になった事もある。それも又、懐かしい。

準備期間に比べ、なんと収穫祭の短い事、まるで花火の様に一瞬で終わった気がする。その一瞬、家畜苑は大盛況だった。仔牛の前で足を止め動かない人、水牛におっかなびっくり近づく人、成牛の大きさにびっくりする人、乳搾りの実演を毎日見に来た親子づれ、豚の寝顔を写真撮る人、七面鶏の不気味さに後ずさりする女の子、ヤギと遊ぶ子供達、メン羊を誉めてくれたアラブの人、そんな感じで3日間が過ぎた。

ここまで出来たのも、渡辺学科長をはじめ、動物を貸してくれ支援してくださった各研究室の諸先生方、山中農場長はじめ富士畜産農場の諸先生方、職員の皆さん、樋口農場長はじめ厚木農場の諸先生方、職員の皆さんの御協力であり、特に富士農場では出産間近の牛まで貸していただき、かなり不安があったと思います。帰ってから無事出産したと聞きました。おめでとうございます。そして、差し入れしてくださった諸先輩方、忙しい合間を縫って手伝ってくれた人達、それに何より俺のわがままに最後までつき合ってくれた家畜苑のメンバー、本当に、本当に感謝してます。俺は今、昨年ある男達の流した涙の意味が解かります。農大に入った事、畜産の学生だと云う事が今、俺の誇りです。

選択ミスの会計

畜産学科三年　村田登巳江

ああ、今日は　何てすばらしい日なんだろう。
欲しかったコンサート・チケットがてに入ったっ！
私は、あう人　すれちがう人にありったけの微笑をたたえて　あいさつをしていた。
「あっ　とみえちゃん」
「やあっ！！（ニコニコ！）」
「収穫祭、何か係についてる？」
「……？　ぜぇーんぜんっ」（ニコニコ）
「会計　やってくれないかな？」
「……あ　いいよ　私で　いいの？」
気持は　既に　あの十月五日のコンサート会場にいた。

日にちが立ち、収穫祭の準備が本格的に動き始めた頃私は、事の重大さに気がついた。もうすっかりﾅ会計の村田ﾅなのだ。
……どうしよう……
去年　会計をされていた高橋先輩に色々指示をあおぐ。
出納帳（……ああ……）
公文書（何んだろ。コウブンショ？）

畜産学科統一本部（イサマシイ名前、何？）
収穫祭実行本部（おおっ）

これは、困った。今さら　できません　なんて言えない。もし　もう少し　成瀬くんが　私の事を知っていたら　きっと　この仕事には　声をかけなかったに　ちがいない。いや　私のこの不安よりも　声をかけてしまった成瀬くんの方が　もっと不安だったろう。

先輩いわく　「会計の他にもペンキ塗りをしたり、泊り込みで作業したこともあったわ」……!!なんて　たいへんなコトなんだ。しかし　人の言葉に忠実な私は「会計だけをやってくれればいいから」の言葉通り　会計そのものだった。収穫祭が近づくにつれ、外で作業をやっている人、ペンキ塗りをしている人は、手がよごれ、気のせいか　※日やけしているように見えた。
（※後に判明したことであるが　これは、日やけならずアカだったようです。）

私は……と言うと　手がよごれるわけでもなく、「この配置が……」と悩むわけでもない。電卓と一緒にたわむれているだけであった。まるで　にわか銀行員のように袋をさげ、「今日は　どの位使ったの？」「あと残りは　〇〇円だよ」そして「じゃぁ　おつかれさま」と帰ってしまう。

さてさて、収穫祭　当日。みんなで作りあげたバックの絵は　とても力強く　そして　感動的。
私は　所属している研究室の出している模擬店〝カレー

屋さん〟で　いらっしゃい　いらっしゃい　と　両手を振って　普段の私からは想像もつかぬような　大口、大声、なかばヤケ気味、客の足を止めようと頑張っていた。

そして　一応表向きのお祭が終わり
残るは　かたづけー
最後のかたづけぐらいはっ　と　それなりに　一生懸命だったのだが、どうもトロくさく、バタバタやっている間に「……ん、もういいよ」と言われてしまう有様であった。本来ならば、パイプ運び、力仕事がうってつけであったが、当時ヘルニアと友人の私には、出来ぬ仕事となっていた。他の仕事は　ともかくとして　会計上の帳尻は　きちんとあいました。
これにて　一件落着！



本当に皆様　御苦労様でした。
そして　何も出来ぬ会計を　文句も言わずに助けて下さり、有難うございました。

家畜苑

畜産学科三年　田代義尚

収穫祭が終わり、ホッとしたと思う気持以上に、今はこの数ヶ月間、共に頑張ってきた家畜苑のメンバー達との友情が深まったことが何よりの収穫だった。

この家畜苑とは、農大北門のシンボルであり、畜産学科の顔ともいえるもので他の大学では、とうていできない、家畜をこともあろうに世田谷のど真中に持ってきて展示してしまうという大規模な企画で農大ならではのことである。

私にとって今回で三回目を迎える収穫祭であるが、過去二回は、参加するというよりも出席するだけで積極的なものではなかった。そのため今回この家畜苑に対する意気込みは、人以上に成功させる気持と共に今までとは違った新しい何かをやろうという思いでいっぱいでした。

この家畜苑を成功させるにあたっていろいろなことをメンバー達と話し合い決めていきました。その中でも今年は、従来とは違った新しいものを取り入れていくことになった。その一つとして、普段あまり動物に接する機会の少ない人のために、乳牛のホルスタイン種を使って

の搾乳の実演、もう一つは、ただ家畜を展示するだけでは動物園にすぎないので、文化学術展らしく各家畜の、来歴、生産能力、体重などを調べボードに掲示し見に来る人に詳しく伝える。など新しい企画を取り入れ製作に入っていった。

まず初めの仕事は、鉄パイプの組み立てと、バックボード作り。鉄パイプは、4～5mのものを400本近く運び、これには、皆ばてた様でした。そしてバックボードは、何十枚ものベニア板を、毎晩遅くまで作業して、富士農場を描いたバックボードは素晴らしくみんなにも好評でした。

そうして、収穫祭準備が始まって一週間位までは、順調に進みましたが、そのうち段々と、研究室の文展やサークルやらで忙しくなり日に日に人が減り、ついには、ほんの3～4人程度となってしまいました。それからというものは、必死の作業で、徹夜をくり返し、何とか準備を終わらせることが出来ました。

収穫祭前日、いよいよ主役の牛、豚、鶏などの家畜が厚木農場、富士農場よりトラックで運ばれてきました。家畜達は、長い旅の疲れも見せずに、皆とても元気でした。

そして、収穫祭当日、会場には、たくさんの人達が家畜苑に足を止め見ていってくれ、とてもうれしく感じました。例年ですと家畜苑は、経堂方面からの人々の入口であり、その入口の北門を潜ると、家畜苑があり、メイン会場へ行くための通り道にすぎなかった様に、思われます。しかし、今年は、工夫した甲斐あってか多くの人の目を引いたようです。その中でも注目を浴びていたのは、乳牛を使っての搾乳が来る人の目に止まり、興味を引いていました。他には、生後間もない小やぎがかわいらしく家畜苑の人気者でした。

収穫祭前半は、環境の変化、輸送中のストレスから、一頭の牛が熱を出し体調をくずしてしまいました。この時は、始めどうしてよいのかわからなくなりましたが、一晩中、つきっきりで看病に当りました。そして、みんなの看病の甲斐あって、牛も徐々に回復し、最終的にはまた元気な姿を見せることが出来ました。そして、この様な、経験は初めてで、普通の畜産の授業では、勉強できないことであり、衛生研に所属している自分にとっては、とても貴重な体験をしました。

こうして、数々の失敗やハプニングにみまわれながらも収穫祭は、無事終わりました。家畜達も農場へ帰り、4号館前の鉄パイプ、バックボードが片付けられた今何かとても空しいものを感じました。

そして、今でもあの4号館の前を通るたびに、あの時のことが熱い思い出として甦ってきます。

北門委員長を終えて

畜産学科三年　花田伸一

自分にとって三度目の収穫祭が幕を下ろした。十月から十一月にかけて四日間におよぶ収穫祭は、農大生及び地域住民をも沸かせる一大イベントといっても過言ではない。その収穫祭も終了した今現在、来年への参考と言った意味も込めて、今年の北門における反省を考えてみたい。

第一には、連絡の不手際さが上げられる。例えば、北門の設置において、警察からの道路許可証を得るために必要な提出物の依頼が総務の方からあったのは、夏季休業に入った頃であり、会室に出むいたところ思い出したように依頼であった。このことは北門委員長である自分が、積極的に連絡を取り続けなかった事が失敗の原因であると考える。

第二には、収穫祭実行本部からの助成金が、収穫祭の半月前頃に正式におり、北門アーチ作製の計画を立てても実行に移せず、始めは自腹を切ってのやり繰りであった。

第三には、北門設置開始時間が前日の午後からであり場所が場所であったために数日前から、設置作業が出来ず、北門初の試みであるパイプを使用しての設置には、深夜まで時間を費やしてしまった。又、初のパイプ使用ということもあり、あまったパイプの収穫祭期間中の置き場所に苦労した。

以上が北門の反省でありますが、最後に一言、言わせてもらうならば、私たちの収穫祭は長い歴史を持つものであり、それと同時に年々、規則が厳しくなっているようですが、正門が表の顔とすれば、北門はなりは小さくても裏の顔といえ、正門とは表裏一体の関係をなし、収穫祭の見せ所の一つであると信じていますので、収穫祭の続く限り、北門も続きますよう、よろしく御願い申し上げます。



家畜苑実行委員

委員長　成瀬　薫　三年（繁研）
副委員長　田原和明　三年（衛生研）
会計　村田登巳江　三年（生理研）
製作委員　阿部雅充　三年（生理研）
大澤守弘　三年（生理研）
小笠原徹　三年（肉研）
田代義尚　三年（衛生研）
田村正道　三年（経営研）
丹下健三　三年（乳研）
土屋知巳　三年（経営研）
青塚直二　年

家畜苑協力者（三年生）

家畜衛生学研究室
天野雅之　須川敏行
石川敏夫　谷山浩史
岡田努　田村英之
柿田一真　土橋知己
倉田詠子　手塚英詞
蔵持洋子　永井愛美
駒野雅彦　福田麻美
小山誠哉　宮崎康平
肉利用学研究室
吉村浩明

乳利用学研究室
樫村奈緒美　松林泉
金田総子　宮川幾代
塚本富夫　村尾政彦
萩原久　臼井立美
市川光晴（二年）
家畜生理学研究室
糸山隆一　山内徹也
三宅康弘　吉見直
畜産経営学研究室
伊藤弘行　武中豊
小笹敏雄　中島一子
高田卓二　山形英三
山田隆明
家畜飼養学研究室
片山敦文　熊澤正敏
家畜繁殖学研究室
稲武司　鈴木久美子
大森重則　高橋宏之
奥田毅　千葉亮
折笠慎一朗　鶴見靖子
片小田雅夫　寺田勝彦
岸哲也　中条康治
楠京市　長谷部すなお
佐伯智文　若菜俊敦

佐藤京子
家畜育種学研究室
荒岡郁人　安藤文世
伊藤信介　井上邦雄
岩瀬利哲　岩附鋭
内田雄大　大澤守弘
岡田博行　鴨志田裕子
河本みちる　小山陽子
斎藤肇二　佐藤浩
庄田雅一　角雄一
三浦辰浩　坂上正行
中里至

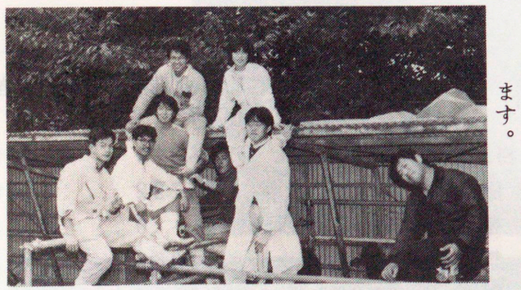
北門アーチ製作委員

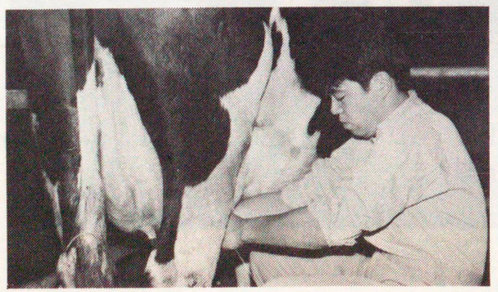
委員長　花田伸一　三年（繁研）
副委員長　千葉亮　三年（繁研）
会計　藤城小百合　二年
林憲　三年（肉研）
永田喜洋　三年（乳研）
木村恵子　三年（生理研）
佐藤浩　三年（育種研）
長野文和　三年（衛生研）
山口登士雄　三年（衛生研）

北門アーチ製作協力者

寺田勝彦　三年（繁研）
平木真砂巳　三年（繁研）
藤原伸泰　三年（経営研）
吉見直　三年（生理研）

御協力いただいた皆様、ほんとうに御苦労様でした。
畜産学科統一本部一同、心より御礼申し上げます。





第94回収穫祭畜産学科統一本部決算報告書

収　入　の　部

項　　目	畜友会からの助成金予算(円)	第94回収穫祭収入決算　(円)	差し引き合計(円)
統一本部（総務）	122,888	188,934	66,046
前夜祭・特別企画	99,717	99,717	0
家　畜　苑	40,000	40,000	0
体　育　祭	30,000	30,000	0
宣　伝　隊	37,395	37,395	0
文展援助費 ＊1	40,000	40,000	0
合　　計	370,000	436,046	66,046

＊1　文化学術展に発表する研究室に援助する。

支　出　の　部

項　　目	畜友会からの助成金予算(円)	第94回収穫祭支出決算　(円)	差し引き残高(円)
統一本部（総務）	188,934	265,319	−76,385 ＊1
前夜祭・特別企画	99,717	62,722	36,995
家　畜　苑	40,000	0	40,000
体　育　祭	30,000	28,960	1,040
宣　伝　隊	37,395	39,045	− 1,650 ＊2
文展援助費	40,000	40,000	0
合　　計	436,046	436,046	0

＊1　統一本部の不足分ならびに　＊2 宣伝隊不足分は，前夜祭・特別企画，家畜苑，体育祭から補綴する。

学内スポーツ大会

第十六回　学内スポーツ大会

総合　五位

バレーボール　男子　三位
　　女子　二回戦敗退

バスケットボール　男子　三位
　　女子　一回戦敗退

ソフトボール　三位

ハンドボール　一回戦敗退

ミニサッカー　一回戦敗退

ゲートボール　一回戦敗退

相撲　Bブロック優勝

剣道　決勝リーグ三位
　　Aブロック三位

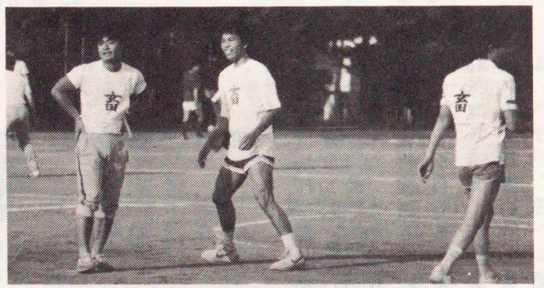
卓球　決勝リーグ四位

軟式テニス　一回戦敗退

バドミントン　一回戦敗退
　　四位

剣道（個人）

真嶋　順一（二年）優勝





畜友会だより

昭和六十二年度定期総会報告

昭和六十一年十二月十一日、図書館4階視聴覚ホールにて昭和六十二年度畜友会定期総会が行われました。

総会には正会員七十名が出席。特別会員の先生方も多数出席してくださいました。議長には三年生の吉見君が選出され、昭和六十一年度決算報告、規約改定案、行事計画、予算案、等が承認されました。以下、承認された議題について報告致します。

一、昭和六十一年度　決算
二、昭和六十二年度　行事計画
三、昭和六十二年度予算
四、畜友会規約改定案
　第五章会計　第二十三条に関する改定案
五、収穫祭準備期間中の各研究室からの本部出向について
六、幹事会の設置について

今年度の定期総会は例年になく充実した総会となりました。出席していただいた先生方をはじめ、会員のみなさんの御協力を感謝いたします。

昭和六十二年度畜友会役員選挙報告

昭和六十二年度の畜友会役員選挙が、一月十二、十三日の二日間にわたり行われました。この選挙により以下新役員が決定致しました。（選挙の詳細は次頁参照）

委員長　成瀬　薫（三年）
副委員長　塚本　渉（二年）
会計　近藤満之（一年）
会計　深津弘行（二年）
会計補佐　李　忠憲（一年）
書記　吉良佐和子（一年）
森　期子（一年）
渉外　神永憲一（一年）
庶務　富沢　寛（一年）

今回行われた畜友会役員選挙は、過去数年行われておらず、今回、現在施行されている規定にそって正式に行われました。この現在施行されている規約は問題点が多く、今後再検討していくつもりです。選挙によって選ばれたことを自覚し、畜友会の発展のため役員としてがんばっていきたいと思います。今後とも御支援と御協力をよろしく御願い致します。

昭和六十二年度　畜友会役員

選挙管理委員会活動を終えて

畜産学科三年　高橋宏之

二週間。この期間が我々選挙管理委員会の実質的な活動期間であった。一月上旬の、まさに後期試験が目の前に迫りつつあった状態の中での活動は、決して楽なものではなかった。が、畜産学科の要となる畜友会役員を選出する為の、いわば誘導灯的働きが出来たことは満足であった。

本年度選出された役員はやる気十分である。特に、畜友会委員長を四年生が務める、ということは画期的であった。四年生は、卒業論文や就職活動に追われ、体力的にも精神的にもハードな一年間を過ごすであろう。しかし、今回選出された新委員長は、こういったことを承知の上で、あえて畜産学科の為に身を投じようと決心している。副委員長以下の各役員も委員長と共に畜産学科を盛り上げてくれるだろう。我々学科生も彼らに応えなければならない。皆の協力が、ぜひとも必要なのである。

さて、今度は我々選挙管理委員会について述べよう。選挙管理委員会が畜友会役員選挙の為に活動したのは、近年来皆無であった。（はっきりいって自分でも驚いた。）また、畜産学科のまとまりをより一層強くしていこう、という周囲からの声も多くなってきた。そこで、選挙管理委員会が再び発足したのである。正に、復活！である。

発足はしたものの、久々に復活したのでどう活動してよいのやら、さっぱり見当がつかない。困り果てた揚げ句、今回は初めて、いや、久しぶりという事で、畜友会規約にのっとって活動する事になった。メンバーは各学年一人づつ。活動時間は昼休みと午後六時以降。選挙日までのタイムリミットは二週間。以下は活動内容である。

一、役員候補者明示（畜産学科掲示板）
一、選挙日程・選挙方法明示（掲示板・各研究室）
一、投票用紙・投票箱作製
一、選挙（一・二・三年生は各講義室にて投票）
　（四年生は各研究室にて投票）
一、集票・開票
一、開票結果報告（掲示板・各研究室）
一、活動記録作成
一、学科長に報告

以上である。

最後に、今回の活動の反省点、及び次期選挙管理委員の人達に要望したい点を挙げておく。

一、活動期間が短かったので、効率よく仕事をする必要があったこと。
一、メンバーが四人（実質的には三年生以下三人）と小人数であったので、一人一人の仕事量が多く、委員の人達に多大の負担がかかってしまったこと。
一、行く行くはメンバー人数を増やしたいこと。（各学年二人ずつ。四年生は一人で相談役としたい。）

では、畜産学科の繁栄を願って、筆を置くことにする。

昭和六十一年度　選挙管理委員長

昭和61年畜友会事業報告

12月12日	昭和61年度　畜友会総会
1月23日	4年生送別会
3月20日	卒業式　4年生へ記念品贈呈
4月　8日	1年生への畜友会説明会
4月16日〜17日	新入生学外オリエンテーション
4月22日	新入生歓迎会
5月25日	第17回ソフトボール大会（雨天延期）
6月　5日〜30日	学内スポーツ大会
6月29日	第17回ソフトボール大会（雨天中止）
7月　1日	別海町実習紹介開始
7月　3日	学内スポーツ大会慰労会
8月　5日	厚木農場での収穫祭説明会
10月　1日	第94回収穫祭　統一本部開き
10月31日〜11月4日	第94回収穫祭
11月27日	第94回収穫祭慰労会
11月30日	第18回ソフトボール大会

昭和61年度 畜友会決算報告

（昭和61年11月30日現在）

（昭和60年12/1〜昭和61年11/30まで）

収入の部

	予算	決算	差引残高
前年度繰越金	210,290	210,290	0
会費収入			
新入生	1,360,000	1,240,000	△120,000
編入生	20,000	20,000	0
転科生	24,000	12,000	△ 12,000
未納会員	220,000	140,000	△ 80,000
利息		3,160	3,160
計	1,834,290	1,625,450	△208,840

支出の部

	予算	決算	差引残高
卒業生送別会費	55,000	54,800	200
卒業記念品費	100,000	60,000	40,000
新入生歓迎会費	130,000	122,612	7,388
『ふじみの』第26号印刷費	420,000	390,000	30,000
講演会費	20,000	0	20,000
ソフトボール大会費	100,000	28,900	71,100
スポーツ大会慰労会費	50,000	64,053	△ 14,053*
夏期実習農場紹介費	10,000	2,270	7,730
収穫祭説明費	25,000	20,460	4,540
収穫祭援助費	700,000	436,046	263,954
総務費	100,000	85,101	14,899
予備費	124,290	8,000	116,290
計	1,834,290	1,272,242	562,048

＊スポーツ大会慰労会費に於いて，赤字額¥14,053は予備費より補充する。

収入総額　　支出総額　　次期繰越金
（1,625,450）－（1,272,242）＝（353,208）

以上相違ないことを認めます。

会計監査　4年　古橋一人　　3年　成瀬　薫
　　2年　広瀬輝明　　1年　堤　信一

昭和62年度畜友会行事予定

12月12日		昭和62年度畜友会定期総会
1月	下旬	4年生送別会
3月	下旬	4年生卒業記念品贈呈
4月	上旬	学内オリエンテーションでの1年生への畜友会説明会
	中旬	新入生学外オリエンテーション参加
	下旬	新入生歓迎会
5月	下旬	球技大会
6月	上旬	夏期農場実習紹介開始 第95回収穫祭畜産学科実行委員会発足 学内スポーツ大会参加
7月	上旬	学内スポーツ大会慰労会 第27号ふじみの編集委員会発足
8月	上旬	1年生夏期農場実習において収穫祭の説明
10月	上旬	第95回収穫祭畜産学科統一本部，本部開き
	下旬	講演会

上記が畜友会の今年の活動です。会員の方々の積極的な参加をおまちしています。

東京農業大学畜産学科
"畜友会" 規約

第一章 総則

第一条 本会は東京農業大学畜友会と称す。

第二条 本会は東京農業大学在学生、教職員、及び卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章 会員

第四条 本会の会員は左記の三種をもって組織する。
一、正会員
二、特別会員
三、名誉会員

正会員は東京農業大学畜産学科在学生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。

第五条 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章 役員及び機関

第六条 本会は左記の役員をおく。
一、委員長一名、副委員長二名、書記二名
会計一名、会計補佐一名、渉外二名、企画三名、庶務二名
二、一年クラス委員四名、二年クラス委員四名、研究室委員八名
三、監査員四名

第七条 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。

第八条 一、委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画、庶務は選挙によって、計十四名選出する。なお選挙規約は別に定める。
二、第六条第二項、第三項に定められた役員は一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出する。
（なお、専攻生は、各研究室員の中に含まれる。）
三、欠員が生じた場合は、速やかに補充しなければならない。

第九条 役員の任期は原則として一年とする。

第十条 総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。

第十一条 一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。

二、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。
三、委任状は総会に際し定足数に含まれる。但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。
四、委任状の検査は役員が行なう。
五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもって追加し即日効力を発する。

第十二条　定期総会は年一回十二月に召集する。臨時総会は左記に該当した場合一ヶ月以内に召集しなければならない。
一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。
二、役員の三分の二以上が必要と認めたとき。

第十三条　総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条　総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条　総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条　総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章　業　務

第十七条　第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、此の召集を委員長が行なう。

第十八条　本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。

第十九条　本会は左記の業務を行なう。
一、会員親睦会
二、講習会及び研究発表会
三、見学調査
四、機関紙の発行
五、その他第二条に附帯する業務

第五章　会　計

第二十条　会費は年間二〇〇〇円とする。その納入は四年分一括し、入学時に納入のこと。

第二十一条　本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。

第二十二条　納入金の払い戻しは行なわない。但し入学取消しの場合はその限りではない。

第二十三条　決算報告は十一月末日までに作成し公示する。承認は定期総会において行なう。

第六章　監　査

第二十四条　本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。

第二十五条　監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なう。
監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条　監査委員は第六条第一項、第二項の役員の兼任は出来ない。

第七章　附　則

第二十七条　本規定解釈の疑義は、委員会において、最終的解釈する。

第二十八条　本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。

第二十九条　本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

畜友会選挙規定

第一章　総　則

第一条　この規定は、畜友会役員の選挙に関し、選挙が公明、且つ円滑に行なわれることを目的とする。

第二条　この規定は、畜友会規定第六条第一項に基づく役員の選挙に適用される。

第二章　選挙管理委員会

第三条　第一条の目的を達するために、東京農業大学畜友会選挙管理委員会を設置する。（以下本会又は単に選挙管理委員会と呼ぶ。）

第四条　本会は、畜友会役員の選出に関して全ての権限を有する。

第五条　本会の委員は、各学年より一名ずつ選出し、委員長はその中より互選する。ただし、これに畜友会役員、及び被選挙人は兼任できない。
ただし、各学年の在籍数の過半数によって選挙は成立し、三分の二以上の挙手二名以上の場合は挙手をもって最高点を当選とする。

第六条　本会の委員の任期は原則として、畜友会の事業年度に準ずるものとする。

第七条　本会は選挙が公明且つ適正に行なわれるように常にあらゆる機会を通じて、公示及び選挙期日、方法、その他必要と認める事項を畜友会会員に周知させなければならない。

第八条　畜友会規定第十六条によって、畜友会役員の不信任を審査し、成立した場合には、本会は新たに役員の選挙を行なう。

第三章　選　挙

第九条　選挙はクラス、研究室の移動投票により行なう。

第十条　一、投票期日並びその期間は事業年度終了日以前の日時を原則とし、選挙管理委員会がこれを定める。
　なお、不測の事態が生じた場合は、選挙管理委員会の決するところによる。
二、畜友会役員の不信任が成立した場合には、二週間以内に選挙を行なう。

第十一条　選挙管理委員会は投票日の十日前に公示しなければならない。

第十二条　選挙人、及び被選挙人は、畜友会正会員とする。

第十三条　選挙は立候補制とし推薦者一名を必要とする。

第十四条　選挙管理委員会は立候補者に対して選挙宣伝の為、適切な援助を与えるものとする。

第十五条　投票に関しては左記の規定に基づいて行なう。
(イ)　投票は同一投票用紙において役員十四名については無記名で投票する。
(ロ)　投票は選挙管理委員会の定める用紙により行なう。
(ハ)　代理投票及び不在者投票は認めない。
(ニ)　投票箱は厳重に封鎖されたものを用い、投票終了後は封印され、開票時まで開くことはない。
(ホ)　投票場は選挙管理委員会が定める。

第十六条　開票は全投票終了後、ただちに行なう。

第十七条　開票は選挙管理委員会の定める場所において、立候補者またはその代理人の立合いのもとで行なう。

第十八条　左記の投票は無効とする。
(イ)　正規の投票用紙を用いていないもの。
(ロ)　立候補者以外の氏名を記入しているもの。
(ハ)　選挙管理委員会が不明と認めたもの。

第十九条　畜友会正会員の二分の一をもって最低投票数とし、これに満たないとき、選挙は無効とする。

第二十条　当選は有効投票数の上位の委員定数までの者とする。

第二十一条　立候補者が定数のときは信任投票を行ない有効投票数の過半数をもって当選とする。

第二十二条　選挙管理委員会は開票後二日以内に適当な方法をもって、当選者を公表しなければならない。

第二十三条　選挙管理委員会は選挙記録を作成し、一年以上保管する。

第二十四条　選挙管理委員会は畜友会会員に選挙記録の提示を求められた時には、いかなる事情があってもこれに応じなければならない。

第四章　予算及び監査

第二十五条　畜友会は選挙管理委員会の必要とする経費を支出しなければならない。

第二十六条　選挙管理委員会は年度末に畜友会会計監査委員の監査をうける。

第五章　改　正

第二十七条　本規定は畜友会総会において三分の二以上の賛成をもって成立する。

第二十八条　本規定に疑義が生じた時は、選挙管理委員会が最終的に解釈する。

第二十九条　本規定は昭和五十年四月一日より施行する。

編集部では〝ふじみの〟第二十七号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとする為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記

募集期間　六十二年九月～十一月下旬

要　項
- 論文、随筆、紀行文、主張　四〇〇字詰～十枚以内
- 写真カット、は随意
- 表紙図案、三色以内

宛　名　東京都世田谷区桜丘一―一―一　東京農業大学畜産学科内　畜友会　ふじみの編集委員会行

発行日　昭和六十三年一月予定

応募原稿は一切お返し致しません。

畜友会〝ふじみの〟編集委員会　TEL（四二〇）二一二一（呼）

皆様の食堂

清潔な設備
低廉な価格

明るいホール

農大食堂

電話 420-4116

歓迎会・部会・クラス会等に御利用下さい

松木家

渋谷円山三業会館隣
電話 (461)2651
(476)4471

酒類・食料品

おりべ酒店

東京農大北門前

編集後記

〝ふじみの〟は昭和三十六年に第一号が発行され以後この二十六号まで伝統を保ち続けてきました。第一号のふじみのは畜産の専門誌とも思える内容でした。以来、年月の流れと共にその形をかえてきています。本来この〝ふじみの〟の目的は何でしょうか。このふじみのの意味をあらためて考え、第二十七号はより一層のすばらしいものとなることを期待し、編集後記とさせていただきます。この〝ふじみの〟に対し御意見・御希望がありましたら、畜友会室の方までおこし下さい。

最後になりましたが、この場をおかりしまして原稿を頂きました学内・学外の諸氏に、諸先輩に感謝すると共に、今後とも「ふじみの」及び畜友会への変らぬ御理解と御支援、御協力を御願い致します。

編集委員一同

昭和62年3月1日発行

〝ふじみの〟第26号

編集責任者 西川二朗

発行者 西川二朗

発行所 東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学畜友会
電話 (420) 2131 (呼)

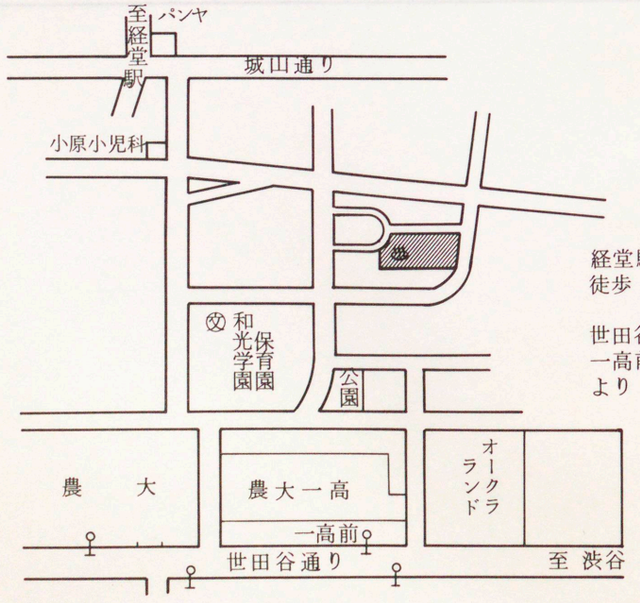
印刷所 世田谷区経堂1-6-13
エルデ・タイプ社
電話 (429) 1067

風呂屋　（有）　**神　仙　湯**

世田谷区桜２－１５－１６　　420－3726

材木屋　（有）　**丸　美　木　材**

世田谷区桜２－１５－１　　428－0521



経堂駅より
徒歩 15分

世田谷通り
一高前バス停
より　5分



モスバーガー
世田谷
桜町店

建築金物，　日曜大工用品
各種塗料，砂利，砂，園芸用品
セメント，コンクリート製品 etc

稲毛屋商会

世田谷通り拓銀隣り　TEL　426－0505～6
工場 TEL　420－1913

秘伝の味

経堂駅前

ラーメン、餃子、肉丼の

丸さん

MENU

餃子定(肉丼、餃子、漬物、スープ付)…… 460円

中華定(めんまラーメン、肉丼(小)、漬物付)… 490円

野菜定(野菜炒め、肉丼(中)、漬物スープ付)… 510円

経堂駅前南口東京相互銀行地下1F　☎427-5373





CHIKUSAN
POWER!